家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

57.5.12

第八十一巻第六号
日本幼稚園協会

6

フレーベル生誕200年記念出版

新刊 フリードリッヒ・フレーベル

岡田正章編　対談者：荘司雅子・平井信義・森上史朗・野辺繁子・宍戸健夫・海　卓子・東喜代雄・白川蓉子・藤井敏彦・利島知可子・西原新一・岩崎次男

A５判・344頁・定価1,800円

幼稚園の創始者フレーベルの理論と実践を現代保育の立場から学ぼう。

1982年はフレーベル生誕200年目に当ります。フレーベルは子どもの幸せのために世界で初めて幼稚園を作った人として有名ですが、その実際の姿はさまざまにいわれて誤解を招いています。本書は現在の日本保育界に活躍される先生方に、フレーベルの子ども観、教育観などをさまざまな角度から議論していただき新しいフレーベル観を浮きぼりにしました。

フレーベルに還れ

長田新著　A５判・190頁・定価1,000円

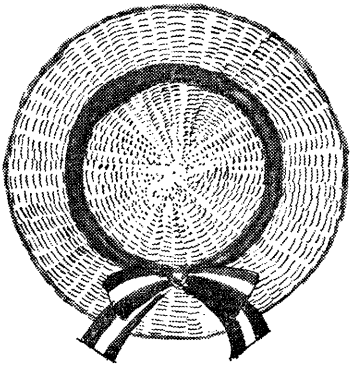
全国学校図書館協議会選定図書

フレーベルの教育目標は、知識の詰め込みではなく、技術を与えることでもない。子どもが内にもっている、何かを作りだそう、表現しようとする、その力を大切にはぐくむことに力点がおかれています。商業主義と結びついた英才教育や、小学校教育を先どりした準備教育が幅をきかせている今日の幼児教育界に、警鐘をならしているかのごとくきかれるのではないでしょうか。幼児教育の父フレーベルの教育学のエッセンスがあますところなく解説されています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十一巻　第六号

幼児の教育　目次

——第八十一巻　六月号——

ごっこ再考……神沢良輔…(4)

科学の「科」の字から
——私の科学概論序説——……柳田為正…(6)

創刊八十周年記念連載インタビュー
菊池フジノ先生に伺う……(14)

日々連続する保育の反省……柴崎ふさ子…(21)

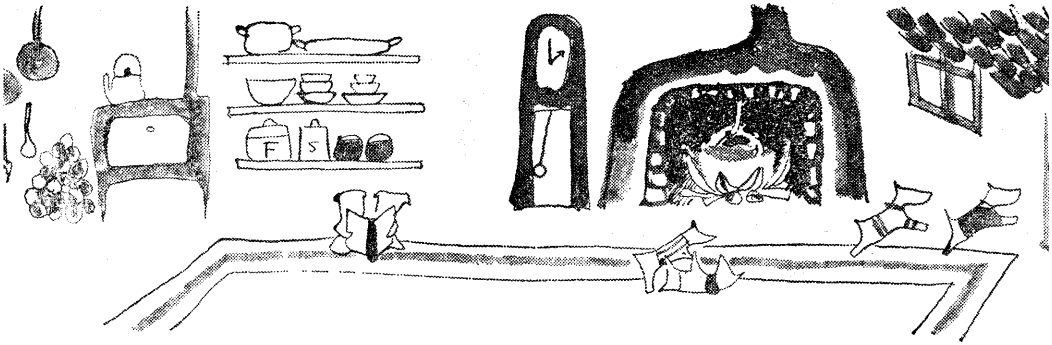
おどりのなかの連続・不連続……石黒節子…(23)

© 1982
日本幼稚園協会

不連続、あるいは断片の輝き……本田和子…(26)
近代短歌に現われた子ども (二)……大塚雅彦…(30)
幼稚園教育課程の変遷と幼児教育の課題……石出恵豊…(38)
山と不連続……浪川七五朗…(46)
不連続……根本茂…(48)
木の裂け目……大橋利恵子…(50)
他者と共にいることが嬉しい間柄を……杉田稔…(52)
エリクソンと幼児教育 (10)……仁科弥生…(55)

表紙・うすい・しゅん　表紙題字・比田井和子　カット・福田理恵

編集委員　外山滋比古・守永英子
本田和子・豊田一秀
編集主任　津守真・皆川美恵子



ごっこ再考

神沢良輔

まだなんとなく肌寒い二月の下旬に、ある幼稚園の四歳児の保育をみる機会があった。

登園直後のこと、女児六名が、ままごとコーナーとその周りで遊んでいた。二名の女児はエプロンを着て、おもちゃの調理台の上で、野菜をこまかくきざんでは、ざるの中に入れていた。畳の上では、ロングスカートをはいた女児二名が、中央に食卓を置き、食器を並べて食事をしたり、ふとんの中に寝かせた人形の世話をしたり、交代にその中に入っていっしょに寝たりしている。

さらに、ままごとコーナーの横に机を置き、二名の女児が並んでいすに座って、自分の作ったセロファンの花やお菓子を並べて売っている。そして机の前を通る幼児たちに、〃買って、買って〃と口々にいうが、保育者以外は誰も買ってくれない。

このようなごっこは、三、四十分以上も続いた。とても楽しそうだし、集中しているようにもみえた。しかし、よくみると、この二人ずつの三グループの女児たちは、ときどき顔を見合わせて話し合い、グループでままごとをしているようにみえるが、活動そのものについては、それぞれ全くといっていい程交流していない。しかし、二人ずつに分かれて遊んでいる幼児の間には、お互になんらかの役割をとっているのだろうと思ってみていたが、それもどうやら判然としないようである。

そのうちに、畳の上で遊んでいた二人の幼児は他の活動に移り、野菜を切っていた二人が、その後へ移動して、前の幼児たちがしていたような活動を続けてやっている。売っていた幼児たちの中の一人は、〃ねこ〃になって、マジックバンドを首輪にして、自分で自分の首につけ、立方体の遊具の中に入

ったり出たりしている。もう一人の幼児は、これをみながら、その横に坐って、絵本をみている。

この保育をみながら、〃ごっこ〃について、いまさらのように、いろいろのことを思うのである。

その第一は、もしこの活動を一日の指導計画に書くとしたら、どのように記したらよいかということである。遊びの発生からみると、ある意味ではきわめて偶然であり、しかも、自由に変化している。このようなことを、例えば〃ままごとをする〃〃売買ごっこをする〃と書いても、それは、どうもそぐわないし、もう少し詳しく〃仲のよい二人の幼児たちがグループをつくり、ひとりでするごっこを楽しむ〃と書いても、それは実態のない、意味のないものになってしまうだろう。つまり、幼児の活動の遊び名や活動名で書くことの味気なさ、不正確さを感じるのである。ではどのようにすればよいかということが問題になる。

第二は、このように、一人ひとりの幼児が自分のイメージを投影してごっこをしているだけでは、〃遊びの発展〃がないし、指導がないのではないかといわれるかも知れない。しかし一般的にみて、同じ遊びをする人数がふえたり、共通のテーマができたりしていけば、遊びが発展したという見方は、あまりにも短絡的であろう。ここにいる幼児たちは、一人ひとりが、自分のイメージをふくらませ、ごっこに没入し、楽しんでいるのである。そこに、ごっこの本来の意味があるのである。

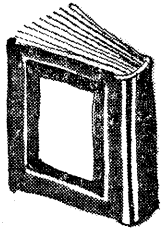
第三は、ごっこにおける〃役割の分化〃ということである。ごっこは役割をとってする遊びであるが、その役割は、一人ひとりの幼児のもっているイメージによってきめられる。それは、家族の役割（お母さんなど、機能的な役割（売る人など）、架空の役割、動物の役割（ねこなど）から選択されるし、これらの役割は共有されることもある。だから、ただある役割について分化させたことが、ごっこの発展ということにはならないであろう。

この他にも、ごっこのもつ問題はあるが、保育内容の充実や構造化という面からも、幼児の遊びの中心となる〃ごっこ〃について、もう一度考えなおし、その指導はどうあるべきかについて考えてみることが必要であろう。

（十文字学園女子短期大学）

科学の「科」の字から

——私の科学概論序説——



柳田為正

一

理学（または理科）と科学——どちらもサイエンスを意味する日本語だ。実用の年代からいうと前者の方が古い。早い話が学校の表看板についてみても、「東京大学理科大学」といった校名は、「同法科大学」、「同医科大学」その他その他と並んで明治早期以来のもので、それが後年総合大学体制の確立を目ざしての「学部」分立制度の施行に伴ない、「理学部」と改称されるに至ったものである。しかしこの「理学」という呼び名も早や現在では、学部や学位の名に冠して、大学という限られた世界に法制上の残存をみるのみだし、「理科」の方も、これまた小中高の教育課程の教科名に僅かにその名を残す状態といってよい。

一方「科学」の方は、明治末葉、とくには大正期に入ってから、それもむしろ在野に自然発生して、にわかに売り出した新名である。その登場の事情や意義をまず論じてみようというのが、実は「私の科学概論」の一眼目の一つといってよい。

サイエンスの意味での科学の語は、もと主として農工医などいわゆる応用理学の分野で時どきの口の端に登る

ようになったもののようで、それもはじめは「百科の学」、「諸科学」というように複数形、すなわち英語なら「凡そサイエンセス云々」といった文脈での使用が多かったようにみえるのだが、この点に関し資料的根拠は目下まだ稀薄である。

ところで私の科学概論の講釈は、このところ文字どおり「科学の科の字から」語り出るのが、何となく習いになっている。すなわちまず高名な藤堂明保先生のしかみに倣って、「科」という漢字の「字解」からアプローチを試みるのである。

二

「科」の字はいわゆるノギ偏の字——偏に当たる「禾」は、漢音クヮ（カ）で、稲だか稗だか、一本の禾本科植物の立ち姿を象形した文字。茎頂に穂の垂れるさまで描き示している。すなわちノギ偏の字は、穀物に関連した漢語群の共通分類マークなのだ。そういわれてみれば、黍、種、穫、そして秋などまで、その線で理解できるし、租や税も、物納年貢の対象としての農作物を思えば、なる程というところである。

右に名の挙げられた字例はいずれも「形声文字」に分類されるもの、すなわち偏に対する「つくり」が当の漢語の音声を表示する役をしているというものだが、その点いま問題の「科」は、字音は「ト」でなく「クワ」である点で、例外的といえる。どうやら「禾」と「斗」との組合わせに何か特別の意味をもたせた「会意文字」の方に属するものらしいのだが、そのいわれいかんは、それこそ藤堂先生にでもお伺いを立てねばなるまい。

試みに手もとの「漢和辞典」を披見すると、「科」の語意としては、まず一番に「種別」、「等級」とある。そのまた原義は、他ならぬ穀類の種別、等級ということだったのだろうか。前記会意文字としての起原も実は文字どおり「一斗の禾」、すなわち各品種の供試品を意味するものだったのでは？　と、そこまでいえば少々ワイルド・スペキュレーションのそしりも免れまい。それは別としてこの「科」の字に対し、上記の語意に即応して「しな」という「和訓」（日本語読み）を掲げている漢和

辞典もあるが、実はいまの場合とくに注目されるのはその点なのである。

「科」の字の訓読みとしては、近世以降ではむしろ「とが」という読みの方が、より普通だろう。すなわち「罪とが」とか「とが人」とかいうときの「とが」である。「科料」、「前科」など、「科」という漢語が「罪科」の意味に用いられるようになったのには、それ相当のいわれがあったわけだが、その問題はあとまわしとして、いまは前記の「しな」という訓みの話である。この訓みの使用例は、現在ではほとんど固有名詞のみに限られているといってよい。すなわち地名ならびにそれに由来する苗字名とである。

三

何科（しな）、かに科と「科」の字のつく地名は、ほとんどもっぱら本州中部、それも信州すなわち長野県下に限られ、反面同県内にはこれはまたその例甚だ多い。さらに信州は学者の多産地としても知られるところから、それらの地名は仁科氏、保科氏、というような高名の博士の苗字としてしばしば全国に知られる。一方かの「更科日記」に香りも高き北信更科の里は、学者ならぬ生そばの名産地としてきこえ、そののれんはこれまた全国を風靡する。この更科町が隣りの埴科（はに）町と円満合併してできた新市名が更埴市（こうしょく）ときけば、行きずりの遊子の耳目には正直のところむしろ興ざめの感もあるが、これも浮き世の沙汰のなすところだろうか。やがて南して蓼科（たて）あたりの爽やかな山気に触れれば、そうした下界のあれこれもしばし忘れて、高原の国信濃の風土をあらためて遙かに思いやるひとときに恵まれようというものである。

万葉歌人らの美薦刈る信濃の国――この「信濃」という漢字書きは、もとより国名「シナノ」に当てられた表音式表記であり、その点武蔵、美濃と同断である。別に上古にはこれを「科野国」と和訓表記している史料もあって、この方は尾張、三河、等々の表記方式にならう。いま問題の「科（しな）」という語は、個々の局地名のみに止まらず他ならぬ国名そのものにまで代表されていたのだ。さてそれでは、そこにいう「しな」とはいったい何をさ

していったものなのだろうか。

現在「しな」という和訓を普通に当てられている漢字は、「品」ぐらいなものである。品は品種、品等の品であるし、前記「科」の原意「種別、等級」とも通じて、まさに「しな」の訓にふさわしい漢字といえる。しかしこの他にも強いて挙げれば「しな」と訓まれた漢字が二、三例あるのだ。いずれも地名や人名の固有名詞、とくに問題の「科」の字の代替役といった使用例が大かたである。その一つは前記そば処更科に代っての「更級」——この書き分けは元祖更科ののれん分けの所産とかきき及ぶ。いま一つは旧皇族の山階宮家——戦前臣籍降下により山階侯爵、戦後は山階鳥類研究所長山階芳麿博士の御家名として存続。この宮号の出自は、史上いく重にも名高い京都郊外の土地柄、かの山科の地（現京都市山科区）とされるが、この地名こそは、信濃国外で知られる「科」のつく地名の稀少例に属する。幕末期宮家創設時とくに科を階に書き換えのいわれは詳らかにしないが、おそらくは階という嘉字を選好されたものかと察せられる。

右の二例で「科」に代る「しな」訓の二字、階と級が揃ったが、いずれもまさに「等級」の語意を共にしている。そこで今度は残る「等」の字を「しな」と訓する例はないものかと心待ちにしていたところ、三年前の春、お茶の水女子大学生物学科新入生自己紹介の席上、問題の等子さんがそれを名乗ったのである。

結局のところ「しな」の訓みをもたされた漢字として、品の他に、階、級、等、科の四例が挙がったわけだ。（因みに筆者手もとの長沢規矩也「大明解漢和辞典」の付録に「人名漢字表」というのがあり、そこには「しな」と訓ませる人名漢字として、右の他さらに「差」や「程」などまで列挙されているが、反面「階」の字ははいっていない。察するにこの場合「人名」といっても「姓」の方は考慮外なのだろう。）

さて漢和辞典の方はこれぐらいとして、今度は諸家の物する「国語辞典」のたぐいに教えを求めることにしよう。そこには「しな（品、科）」という項目がある。ま

ずこの語の原義、古義として、「坂路、階段を指摘し、続けてその転義である「種別」や「等級」を挙げるというものが多い。してみると日本語の「しな」は、その語意範囲としてはさきに列挙した「しな」訓の漢字中、「階」の一字にもっとも近いことになる。

「しな」の古義は「坂道」。――そういえば、古歌の枕ことばとして、「しな照る（片岡山）」を始め、「しなさかる（越の国）」、「しな立つ（筑摩）」などという関連項目も目につき、しかもこれらの「しな」には古来「級」の字が当てられているようだ。神話にいう「科戸（しなと）の風」の主は、級長戸部命（しなとべのみこと）と表記されてきており、この「科戸」の語意については折口信夫先生あたりの御説もあるようだが、結局今一つはっきりしない。国語辞典にはその他樹名の「しなのき」という項目もあって、「科木」、「級木」などの字が当てられている。この木は信州の山野にとくに多産し、その樹皮から製する繊維で科布（しなぬの）、別名信濃布（しなのぬの）なるものが織られる由だが、これらなどあるいは産地名の信濃をその名に負う派生語かとみられる。

国名の信濃、地名の更科、山科のしなは、どうやら本来「坂道」や「傾斜地」の意味だったとするのが、地形学的にみても国語学的にみてもいまのところ一番単純ですなおな解釈ということらしい。その意味からいうと、この「しな」に当てるべき漢字としては、科や級よりもむしろ階の字こそぴったりであったわけだが、何かの理由でこれが採用され損ねたのだろう。

わが科野の国は、そこで坂道、峠道の国、乃至は高原の国そして――更科、仁科（更も仁も意は「新」）などは、新たに開拓された高原の農地という一応の理解に到達した。断崖絶壁ならぬゆるやかな傾斜地、そこは往時は開拓して放牧や農耕の適地、そして当節はキャンプ地やスキー・ゲレンデの観光資源として生きる。そのスロープは、「階」の字を連想させるような段差を連ねた段々畑のたぐいか、それともなだらかな曲面の連続か。前者ならばまさに英語の「グレード」に相当して、位階、等級の語義に直結するし、後者ならば「グレーディエント」の相当語となって、緩急勾配の意味をもつようにな

る。前出洛東山科の里などは、いまは新幹線が逢坂山トンネルに飛びこむ直前車窓外一瞬の景観にすぎず、かつてわびしき大石隠棲の地もいまや高層マンションの林立する京わらわ方のベッドタウンと変しているものの、北から南へゆるやかに傾斜するその地形は、見まがう余地もない。正しく「山しな」の里だ。下って東都西南の門戸「品川」などの場合は、果して往古その名を負う川がこの地に実在し、丘辺のスロープを東流して海に入っていたものなのか、今は知るに由ない。

国語辞典には、その他「しなう」といった動詞や、「しなやか」といった形容詞も列んでいて、その何れにも撓の字を当てているところ、それらの語と問題の「しな」とのかかわりについては明記がない。竿や板の一端に外力が加わったさいぽきんと断絶せずに、しなやかに彎曲する——そうした性質（可撓性）や反応をいうこれらの語は、名詞の「しな」と結びつかないものだろうか。

四

さて私の「科」の字考は、以上で一応打ち上げとしたい。漢和辞典では「科」の字のさらに進んだ語意として、罪科や科挙などの用例が後続する。種別、等級としての「科」は、中華の地では刑罰についても公務員の資格にも、等しく適用されたものの如くだ。最初にちょっと触れた科＝とがの訓などは、そうした派生的使用例にかかわるものだったのだ。もと穀類の品種や等級をいう素朴な意味に始まるこのノギ偏の漢字漢語は、中国文化の進展とともに、たちまちにして社会万般の事物を分類し、また等級づけるさいの一般的用語にまで汎化・昇格したのである。シナノの地名の表記に「科」の字を当てているのも、決して単なる「当て字」のたぐいではなく、地形の高低差にかかわるものであった概念の表記に、たまたま品質の等級の上下差にかかわる同訓・類意の漢字を借用したまで。そこで「科学の科の字は科野の科の字」ということになる。

さて、サイエンスの日本語として「理科」や「理学」の旧名が、たまたま世紀の変わり目あたりのころ、にわかに「科学」の新名にとって代わられたという冒頭に挙げ

[illegible]

大正期の日本に育った人間には、まさに眼のあたりにみた出来事だったのである。当時は「科学画報」やら「科学知識」やらの啓蒙的刊行物、世にいう通俗科学誌の相次ぐ発刊をみた時代で、少しおくれては「子供の科学」（のちに「面白い理科」）などが、原田三夫主幹の熱意ある指導力により創刊された。表紙に黒字で印刷インキのあとも鮮やかに刷り出された明朝体の誌名、われわれ幼い読者らの心は、まずこの看板文字の視覚的魅力に心を躍らせたものである。せっかく一旦商業実務の道を修めて父祖譲りの帳場におさまったしにせの長男が、たまたまこうした雑誌の魅力にとりつかれてのあげく、家督を舎弟に譲り、理学部再進学を志した実例も小生身辺にあり、この方などは後年一流大学教授として動物発生学上のりっぱな業績を残されている。もちろん看板文字だけに止まる話ではなく、その旗印を掲げての新興科学の普及啓蒙活動そのものにこそ当時の若い読者らへの牽引力は具わっていたのである。

[illegible]

ル的魅力にもかかわらず、実は「サイエンス」の新訳語として、致命的ともいえる欠陥を、一つならず二つももち合わせていたのである。その一つは、いわば語意表現上の欠陥である。この欠陥はまさに、「科学」の科の字の意味にかかわるものである。すなわち「科」とはおよそ一般に対象事物の種別・類別の意にすぎない。いいかえれば特定事象群を対象とする「専門別（スペシャリティー）」という程の意味であり、従って科学とは単に専門学というだけのことになる。サイエンスの訳名としてただ「専門学」というのでは、いかにもお粗末ないわれの命名と評さねばならない。第一、専門化（スペシャライゼーション）は「サイエンス」だけの独占ではなく、その証拠には学校の「学科」名や「科目」名としても理科以外に文科、法科、家庭科とすべてがひとしく「科」の字を名乗ってきたのだし、一方病院を訪れれば内科、外科から始まってどちらを向いても「何々科、何々科」の世界なのだ。

これに反し旧名の「理学」の名の方には、それ相応の根拠がある。物の本によれば江戸末期に西洋科学の紹介導入のさい、自然科学の代表者としての物理学（フィジックス—原義は「自然学」）の訳語として「窮理学」の新名が新造され、のちこれが簡略化かつ呼び分けされて「理学」と「物理学」の二名がそれぞれ定着したものとされているようである。「理」という漢字は、これまたノギ偏ならぬ玉偏の字、すなわち貴石・宝石関係の語字群の分類マークを帯びる。理はいわば形声文字で、つくりの「里」は「リ」の音を表示するが、もとの語の里とは親子関係の語であり、語意の上でも「里」に通じる。象形乃至会意文字としての「里」は、整然たる人為的地割りの施された村里や市街を意味するのに対し、玉偏の「理」は、大理石、めのうなど各種天然の玉石に現われた縦横の条線、すなわち修理をさしていう。さらに転じて「理」の字は、凡そもろもろの物象の筋道、理路理法を意味するに至る。古来の和訓「ことわり」は、この転義に対応するものといえる。学問としての「サイエンス」本来の学的態度に照らしても、この語がきわめて適切な命名であることは否定できない。論理学、生理学、その他その他の学問分野名におけるこの字の多出も、まことに無理からぬことに思える。

このようないわれ由緒のある理学の名が、科学などという雑駁・無雑作な新名にとって代られたことは、いったいいかなる事由によるものだろうか。科学という名のいま一つの不適格性は、実用上の効率に関するものである点から、さらに一段と致命的といえる。それは、いまさらいうまでもない同音語「化学」との混同混線という毎度おなじみの災厄だ。この方の問題の経緯やエピソードについては、いずれ機会があれば稿をあらためて述べたい。

五

問題は、このようにさんざんのハンディキャップを負わされた大正っ子の「科学」が、毛並みの良い明治っ子の優等生「理学」を駆逐したのには、それだけの理由があったはずだという一点にあるのだ。〈以下37ページ〉

菊池フジノ先生に伺う

——大塚移転当時の附属幼稚園——

《聞き手》

中島　国太郎

私が在園した昭和八～九年当時（主事倉橋惣三先生、担任及川ふみ先生）の附属幼稚園の記憶を確かめたいと思い、昨年三月、菊池フジノ先生にお便りをした。先生は、五十年近くも前の私のことを覚えていて下さり、先生のお宅近くの西荻窪の喫茶店で、約二時間にわたって、私のさまざまな質問に答えて下さった。以下は、その折の抜粋である。

＊

中島　先日、附属幼稚園の堀合先生に伺いましたら、お茶の水から大塚に移った当時の、昭和八～九年ごろの記録が、ほとんど残っていないということで。

菊池　そうですか。そのころは、まだお庭が整っていなかったんでございますよ。倉橋先生が、「大きな山を作りたい」っておっしゃってね。土を盛った山があったん

ですよ。そこへみんなお子さんたちが登って、どろんこになって遊んでいたんですけど。その後ああいう建物だったら庭園らしいものが必要だっていうんで、日比谷公園の庭園の課長さんが倉橋先生と御懇意な方で、その方が設計してああいう庭になすったんでございますよ。

中島　私の記憶ですと、お庭にブランコはあったような気がするんですけど。

菊池　そうです。「池の組」の真向かいぐらいに。

中島　それから、ジャングルジムもあったと。

菊池　はいはい。ありました。ブランコの隣りに。

中島　あのころは、ジャングルジムなんて珍しいところで。

菊池　そうです。

中島　すべり台でも面白く遊んだように思うんですけど。

菊池　すべり台もそのころからありました。

中島　それから、藤棚も。

菊池　ありました。これはね、お茶の水から持っていった藤棚なんです。昔、震災前は小学校との境、あの辺ずっと藤棚で、その藤を震災直後のバラックの幼稚園でも植えてたんです。その藤を持っていきました。

中島　今の園舎には蔦がはっています。

菊池　そうですね。今は一杯に。でも、そのころはまだちょろちょろという程度で。

中島　それから、ステンドグラスが素晴らしかった。

菊池　あの園舎が建つと、すぐからあったんです。それには、こんな話があります。あの園舎はみんなで六万の予算だったそうです。それでも余って使い途がなくて、ステンドグラスを作ったんだそうですよ。そして、その色のわりめのところは、鉛でついであるんで、修理が大変だから割らないようにと倉橋先生から言われて、ステンドグラスには気をつけて開けたてをしたものです。

中島　そうすると、あのステンドグラスを考えられたのは、やはり倉橋先生だったんですか。

菊池　倉橋先生……ですね。その前の堀先生もね、外国を見ていらしって、御自分が設計なさった、とおっしゃるんですね。

中島　そういう先生方のお陰で、私たちが今幼稚園へ伺っても、懐しい「林の組」「池の組」をそれぞれ表す、「林」や「池」を描いたステンドグラスが見られるわけですね。……ところで、当時は何時始まりでしたか。

菊池　九時ですね。でも私どもは、だいたい八時半には来ておりました。

中島　登園した時に、先生方はもう教室に入っていらっしゃった。

菊池　そうですね。倉橋先生の主義は、早く来て、お部屋もきれいにして、空気も入れ換えて子供を待ち受ける、というのがいい先生だ、っていうことになっておりましたからね。

中島　特別、時程というのは決まっていなかったようにも思うんですが。

菊池　私なんかですと、お子さんを自由に遊ばせておきますけれど、ちょっとその遊びに飽きたっていう様子が見えるんですね。そういう時に、みんなで一緒に仕事をするとか、お話を聞くとか、お子さんと一緒に計画するということをやっておりましてね。お茶の水は、「自由保育」だって言うんですけど、私どもは「自由」ということはないんです。「混合」という形ですね。例えば製作にしても、先生のをあてがうんじゃなくて、みんなが考えてやるっていうような方向に持っていきましたからね。

中島　あのころの製作っていうと、きびがら細工なんかも。

菊池　今はもうありませんけどね。

中島　ねん土は、すぐに乾いてしまったりして、難しかったように思うんですけど。

菊池　そうです。このごろは油ねん土ですけど、あのころは本当のねん土で、かめにはぬれぶきんを掛けておかないと、乾いてしまって使えないんです。そういうことには、絶えず気をつけていたわけです。

中島　今で言えば「切り紙」みたいなものもしました。糊ではりつけるんですけど、その糊が手あかで黒くなったり、手に色がついたりして、なかなかうまくいきませんでした。

菊池　そういうことがありましてね。「ぬり絵」とか「切り紙」とか、絵をかくこと、お話をきくこと、お遊戯をすること、そういったことをいろいろ組み合わせて保育案を立てたんですよ。

中島　私たちには、やらされた、なんていう記憶はないんです。

菊池　みんな、そう言いますね。「われわれはいい時代に幼児だった」なんて言ってますから、当時の人は、やらされたっていう気がなく、楽しくやるようにしていて、子供が進んで興味をもってやるように仕向けたわけなんですねえ。

中島　そういう時、いちばん苦労なさったのは教材の準備ですか。

菊池　まあね、苦労したっていう記憶はないです。子供が楽しむもの、興味あるものをね、子供の生活を見ながら考えて、それを子供と相談しながら案を立ててそろえるわけですね。でも、教材なんてだいたい廃品を利用したものです。今の人は新しいものや、セットになっている既成品を使いたがるようですけど。「鯉のぼり」なんて

いうのは、包装紙の大きいのを使ったりして……。

中島　幼稚園では、いったんお庭へ出ますね。そうしてまたお教室に戻ってくると、何かしたくなるような気がしたと思うんです。何でそういう雰囲気になったんでしょうか。

菊池　そうですね。そういうふうに心がけておりましたからねえ。絵本なんかもちょっと開いておいたり……。

中島　いくつかの記憶のうちの一つに、羽子板を作ったような……。

菊池　ああ、そうでしょう。それはね、暮れにはお正月のおみやげを持って帰れるように、たいていは致しましたね。お子さんが自分の好きな絵をかいて、そのあと「焼き絵」といって電気でさすると焼けるんですね。そして色を塗って、本当の羽子板のようになるんです。味があって。そんなことは必ず致しました。

中島　そういうことが経験できたのは、及川先生が、今で言う絵画製作の方面に御堪能だったからでしょうか。「ぬり絵」にも「及川ふみゑがく」というのがたくさんあって。

菊池　そうなんです。及川先生がおかきになったのを印刷して、昭和九年ごろは「ぬり絵」をよくやってました。戦後アメリカの指導者が来まして、創造性の芽をつんでしまうから、「ぬり絵」はいけないっていうことになってやめましたけどね。でも、子供って好きなんですね。

中島　みんな、「ぬり絵」は大好きでした。

菊池　考えてみると、「ぬり絵」をしたからって、そんなに創造性が失われるものじゃないと思うんです。まあ、しょっちゅう「ぬり絵」をしているんじゃあ、そうかもしれませんけど、自由な表現の分野がたくさんございますからね。私、失われないと思いますよ。それこそ、あの当時のお子さんと最近のお子さんを比べても、ちっとも違いませんものね。昔のお子さんも創造性がありました。以前は一週間に一度か二度はね、及川先生のおかきになったもので「ぬり絵帳」っていうものがありまして、それをよくやったものです。

中島　それから、「マサカリカツイデ」などのお遊戯なんかもよくやって……。

菊池　あのころ、お遊戯は遠慮会釈もなくやっていたんですけど、戦後やっぱり創造性育成のためには、ああいう既成の遊戯は喜ばれなくなったんです。でも、私は、ああいうものもあっていいと思います。みんなが同じ踊りを踊るっていうのは、楽しみですものね。どこでもやりますもの。田舎でも、開発途上国なんかでも。やっぱり人間の喜びの表現ではないでしょうか。ああいうものを「いけない」っていうのは、指導の方法に問題があるのでしょう。「こ

うしなさい。ああしなさい。」というんでなくて、金太郎さんの様子を考えさせたりしてね、そういうふうな指導をすればいいと思うんです。そして、お子さんっていうのは他人の真似をする習慣がありますから、例えば、誰かが考えた踊りをする時でも、「先生、こんなこと考えたんだけど、やってみるからね、悪いところあったら言って」って言うと、「いいよ。」なんてお子さんが言ってくれますね。そして、自然にそれを真似しますからね。いいと思うものを真似します。そういうことで、指導の方法を考えれば、既成の遊戯もあっていいと思います。

中島　さっき申しましたように、お教室に入るとそこで自然に何かしたくなる、折り紙を折るなり絵をかくなり……。

菊池　積み木をするとかね。

中島　あれが、倉橋先生の選集などに出ている「誘導保育」っていうんですか。

菊池　いえ、「誘導保育」っていうのは、まあ、先生の計画の一つなんですけどね。子供の生活をじっと見ているとね、子供たちが積極的に生活的な興味を持つような主題が、遊びの中にあることを発見します。そういう、何かしら子供の生活にまとまりを与えるようなテーマを教師が用意して、幼児を誘導していくんです。私はね、例えば「人形の家」っていうテーマで、したんでございますよ。その時、この人形が、何か買い物をしたくなるはずだ、買いにいく町を作りましょう、町へ行く時に渡る橋を作りましょう、などと発展させましてね。川や橋や、釣りでもしているようなところを作って……。こんなふうに、一つの主題のもとに、幼児の生活を発展させていくんです。一週間とか、長い時には一箇月とか、子供の注意や興味が継続して、作ることや、遊びが一つのテーマのもとに、いろいろと展開されていくんでございます。「おもちゃやさん」なんていうテーマでもやってみました。

中島　めいめいおもちゃを作って、買いに来る友達に売るようなかっこうの……。

菊池　そうなんです。こういうことをしてみたくなったのは、私が女高師のころ、「ダルトン・プラン」っていうのが言われておりましてね。「自由」と、それから、みんな一緒になって何か仕事をする「共働」というのが基本の考えになっておりましてね。それまでの、一斉に教え込む形の教育に対して、当時としては非常に新しい考えだったわけでして、そういう考えのもとに「目的的活動」っていうのをやって、それにたいへん共鳴しておりましたから、そういう生活をさせれば子供たちが喜ぶだろうと思いまして……。そのころ、倉橋先生が、何でもやっていいっておっしゃいましてね、教師になるとすぐそんなことを始めたんです。そしたら、それを倉橋先生が見

ていらして、「誘導保育」という名をおつけになって、そういう理論をお立てになった。

中島　そうすると、「誘導保育」を実際におやりになり始めたのは、菊池先生でらしたわけですね。

菊池　いちばん初めだと思うんですけど。倉橋先生がたいそう喜んで下さって、先生方みなさんがそれぞれ致しましてね。「誘導保育」という倉橋先生の御本もあるくらいでございます。最初にね、誘導保育」のごく小さいんですけど、「動物園」なんかやったんです。「サウンド・ボックス」っていうのがありましてね、倉橋先生が外国で見てらして、これを一部屋に一つずつ置いたんです。砂をいっぱい入れまして、雨の日でも教室の中で砂遊びをしたものです。

中島　お茶の水から大塚へ引っ越しもたいへんだったでしょう。

菊池　でもね、事務の方などが大分やって下さいましたから、たいへんだったという記憶はございません。引っ越す時に、いろいろ大事な荷物があるので、そのころ「誘導保育」で作った、子供の入るような「おうち」――お茶の水のバラック園舎のちょうどうしろに材木屋さんがありましたから、そこから仕入れた材木で、子供と一緒に作った「おうち」なんですけど、「こんなもの持っていかない。」って言ったんです。そうしたら倉橋先生が、とんでもない、それこそいちばん大事なものだ。」っておっしゃいましてね、この「おうち」を選んだ覚えがあるんです。それでね、大塚の、ちょうど職員室の向かいの「山の組」へ持っていきました。

中島　そうすると、先生の組でお使いになった。

菊池　そうですね。今、クラス会なんかをすると、私のクラスのその「おうち」が、とても羨ましかったっておっしゃいますね。ふだんは私のクラスだけで使っていましたから。「一日、先生に貸してもらったこと、ありますね。」なんておっしゃるんですよ。私は忘れていますけどね。

中島　その「おうち」は、扉が開くようになっている。

菊池　ええ。でも素人細工ですから、ひん曲がっているんです。

中島　子供っていうのは、よく押入れの中に入りましたり、こういう中に入るのが……。

菊池　そう、好きなんですね。自分が入れる「うち」ね。当時は、こういうふうに、わりと大胆に大きいことをやっていたんですよ。津守先生などは、「今の幼稚園には、それがない。」っておっしゃいます。あんまりきれいごとで。戦争後も、例えば園庭の一角に「飛行機」をこしらえて、みんなでのったりしたんです。薄い板ですけ

ど、そういうものを使って「飛行機」を作り、子供たちがのって遊んだ。

中島　自分がのれる「飛行機」。素晴らしいですね。操縦して空を飛んでる気分を味わったでしょうね。こんなに大きいものを作ったんだっていう自信もわくし。でも、ぬいぐるみのお人形なんかは先生方がお作りになったんでしょ。

菊池　いいえ、子供と一緒に致しました。「じゅうたん」なんかもね、子供と一緒に作りました。私がお米屋さんの麻袋を買ってきて、水をうってごみを流して、それから男の子でも毛糸針を使って完成しましたよ。

中島　そういえば、及川先生も腰掛けてぼくらと同じようなことをなさっていたように思います。その時のことを思い起こしてみても、先生に手伝ってもらったっていう記憶はないんです。子供ができるようなもので、それぞれに作らせていたんでしょうか。

菊池　そうです。子供にできないことはありません。でも、時にはお子さんによっては難しいもので手伝ってあげることもありますけど。お子さんは、手伝ってもらったという印象はないようです。

中島　そのへんは、先生方の御指導の何とも言えない何か、によるんでしょうけど。

菊池　救いだと思うんですけどね、それが。「先生に手伝ってもらった」なんて言う人はないんです。みんな「できたよ」って喜んで見せて歩いています。

中島　そうです。教え込まれたっていう印象は、全くない。

菊池　そうおっしゃいます。みなさん、そのころの方は。

中島　それが不思議なんだな。

＊

菊池先生のお話は、まだまだ続いた。そして、その不思議さが何によるものであるかは、お話の言葉からはつかめなかった。しかし、七十九歳の先生が、私の面影をたよりに西荻窪の駅の改札口で三十分以上も待っていて下さったという、この日の先生の私へのお心づかいを考えてみても、当時の私どもへの御配慮が、並々ならぬものであったことを感じた。終って、先生のお宅の前で、先生のお姿を写真に撮らせて頂くことができた。先生が、いつまでもお健やかで、この日のようなお話を、また聞かせて頂くことを願いつつ、先生の温かい視線を背に受けながら帰途についた。　＝了＝

◆聞き手の中島国太郎氏は、附属幼稚園卒園生。現在は、東京都立教育研究所で幼児教育部門の指導にあたっています。

日々連続する保育の反省

柴崎ふさ子

長い夏休みも終わり、二学期が始まる九月のはじめ、私は期待と不安の入り混じった気持で保育室へ向かう。夏休みの間に、子どもたちがどんなに成長しただろうか。一学期と同じように元気な顔で「おはよう」といって来るだろうか、と心配している。それもつかの間「おはようございます」と久しぶりの再会を喜び、あの明るい子どもらしい表情で、次々と登園してくる。

「ぼくねえー、今どうしてここにいるか」

「あら、ほんとね。Hちゃんここにいるわね。でもどうしてって、わからないな。」

「おばあちゃんちにいないからです。」

夏休みの間の経験を、先生の知らない間のでき事を伝えたいという子どもの気持を、ほほえましく受けとめながら、子どもと会話をかわす。そして気がついてみると、全員が部屋に入り、したくをしている。

私が特別に気になっていたのは、T子のことであった。T子は一学期の間、時には「いやー」と激しく泣いて幼稚園に来れなかったり、テラスの所でじっとしていて抱きかかえなければ部屋に入ることができなかったり、又私の様子をうかがいながら、三十分もかかってやっと部屋に入ってきたりの毎日であった。私は、ちょっとしたことでおびえたように泣くT子を、片手に抱きかかえながら、三十五名の入園したての子どもたちと過ごしていた。そのT子がいつの間にか、みんなといっしょに部屋に入り自分のしたくをしている。そういえば、数人ずつ「せんせい、おはよう」といってくる子どもたちといっしょに、私は「Tちゃん、おはよう」と他の誰に

でもするように、言葉をかけたかもしれない。その後は、私がそのようにして、T子が登園してきたことを暖かくうけとめさえすれば、何の抵抗もなく部屋に入ってしたくをし、元気に外へとびだして遊ぶ姿がみられるようになった。

T子の中に、このような変化がどのようにして起ったのだろうか。四十日間の夏休みの間に、T子が成長したといってしまえば、それですむかもしれないが、それにしてもそんなに大きく変われるものだろうか。もし一学期のように、連続する日々が続いていたらどうであっただろうか。変化の仕方が違っていたかもしれない。毎日幼稚園に来ることに対して、夏休みという不連続の時間を過ごしたことは、T子にとって大きな意味があったと思う。

T子の夏休みの間の変化を少しでも探りたいと思い、母親に「夏休みの間に何か変わったことはなかったですか」とたずねてみた。すると母親にとっても、T子の変化は何故だろうと思う程大きかったらしく、T子自身に「二学期になったら、どうして泣かないでいかれるようになったの。」と聞いてみたということであった。何とその答えが、休みの間に『考えた』ということだった。幼いT子が『考えた』と表現したものは、自力で考えたことではあろうが、考えてそれが実行できるだけの力が、それまでに育っていたからに違いない。夏休み前に母親と話し合いをした。その時には、どうしていいかわからず涙を流していた母親だった。しかし夏休みの間に、母親がどれだけT子のことを考え、T子に今必要な体験をさせてあげ、T子とともに楽しく過したかがうかがいしれた。

T子は、もともと現実を逃避するような子どもではない。いろいろな活動にも「やりたい」という気持が人一倍強くありながら、一歩足を踏み出すことができないために、きっかけがつかめないでくずれてしまう。一歩足を踏み出すためのエネルギー、これが育ってくれれば、T子は意欲がある明るい、しかもとても繊細な感覚をもった子どもになってくれるだろう。

一学期の間、泣きながら、私に抱かれていたT子は、母親や先生、時々送ってくる近所のおばさんたちが、どれほど大変な思いをしているか、ひしひしと感じていたに違いない。しかし泣かないで幼稚園に来るというきっかけがつかめなかったのかもしれない。それが夏休みの間に『考えた』と表現されているが、二学期からは「やめよう」というひとつの決心を、子どもなりに夏休みがあったからこそできたのではないだろうか。

逆に日々連続する保育が続いている時には、保育者自身も、子どもを押し出してあげるきっかけをつかめないでいることが多いのではないかと反省させられる。もうその子どもが充分に力を貯えた時に、その子どもが一歩飛び立てるように保育者がきっかけをつくってあげなくてはならないのではないかと考えさせられた。

（茨城・竹園幼稚園）

おどりのなかの
連続・不連続

石黒節子

第五回の舞踊公演〝桜雲〟を終えて、早や一週間たつ、そのときお祝いに頂いたあんなに美しかった色とりどりのバラの花が、日に日に色を変え、その美しさを失っていく淋しさが私は好きだ。ひとつのことが終り、過ぎ去っていくのをはっきりと感じとることができるからだ。そんな私が、昨春、桜に心をとらえられて、その思いを舞踊にしようとする過程で、まず、目にしたものは、梶井基次郎の「桜の樹の下には」と坂口安吾の「桜

の森の満開の下」であった。梶井の作品は、花の美しさは桜の木の根元に埋っている屍体の「水晶のやうな液」を吸い上げることによってでき上がるのだとして、死を抱きこんでいると考えなければ理解しがたい程の桜の美しさであるという狂的な花の見方だ。それに比べ坂口安吾の「桜の森の満開の下」では、山中に住む盗賊が、うばった美しい女を背負って満開の桜の森の下を通るとき、女が紫色の顔の大きな老婆になったと思って首を絞めて殺してしまう。気がついてみると、美しい女の屍体が横たわっていた、このときはじめて男は泣き、悲しみを知った。そして、やがては女も盗賊も降りつもった花びらのなかにかき消えてしまう、このラストは、いたく私の心をうった。ここでは桜のみせる生と死の世界が人を狂わせ殺人を犯させる。これら花のもつおもしろさは私をかきたて、以来古事記、伊勢物語、山家集、幾多の歌集を読むきっかけとなった。そして、これらを通して、花のもつ共通性、「美しさ」とその陰の「呪」が私の構想のはじめとなった。この時点で、昨春、桜をみたときの不安を納得することができたからだ。

しかしながら、これを踊りに構成するにはもうひとつ無理があった。日頃感じている文学と踊りの違いであった。そこで次の作業として、歌舞伎舞踊のなかで扱われている桜に関する台本を読みあさった。そのなかで、さき程の二点を満足させるのに近い展開が「関の扉」にみられた。ここでは少将宗貞と小野小町が美しい男と女として登場する。それに対して天下の大罪人大伴黒主とそれを悩ませる墨染桜の精の組合せで進行する。

これら舞踊の筋がきに道理性を追うのはむずかしい。舞踊の台本では思考の道筋を通らず、場面、場面が舞踏的に面白く展開される必要がある。つまり道理のある連続ではなく、エネルギーの強弱や、種々の情緒の伴う展開なのだ。そして一見不連続にみえるこの場面が、結末において「あー、そうか」と人を納得させるものが必要とされる。そこで、本質としてつかんだ桜の美しさと呪というコントラストを場面として生かしながら、舞踊的連続にしなければならなかった。具体的には、桜を代表

するような美女として数多く描かれている小野小町を登場させることにした。そしてそこに美し過ぎる故に実らぬ恋として、桜の性を代弁する役柄とした（桜の雌雄は同じ木の下で受精しても実らない習性をもつ）。この役は、東京シティバレエ団のソリスト吉沢真知子さんと中島伸欣さんにお願いし、そこに「空しい性」というタイトルを織り込んだ。それに対して、その花を盗む者として、ドラマチックな演技を得意とするモダンダンサー、五木田勲さんを登場させ、美しい花のような女を奪ったあと、桜の花の下を横切るとき、鬼女と勘ちがいして殺してしまうくだりを演じてもらい、これを花の呪とした。私は、桜の樹の精として登場し、運命を支配する、超人的存在を表すことにした。ここでは東洋の霊性を演技に織り込むのに苦心した。この美しい男女、それを破壊する盗賊、あやつる精を骨子として、花見、カラスを登場させ、楽しさ、笑いを織り込んだ。これらの場面はまさに不連続であった。そして終章において一気に、この不連続が意味をもち、観る人のなかで連続するよう心を砕いた。モダンアートの奇才といわれる高山氏をはじめ、多くのスタッフ、本学表現体育学専攻生の協力を得て、二日公演を無事、終えることができホッとしているところである。最後に本作品を通じて私の心に一貫していた句を紹介して結びとしたい。

この花の　下にて逢はば　かなしからむ

上田　晩春郎

（お茶の水女子大学）

不連続、あるいは断片の輝き

本田和子

◆　◆　◆

子どもたちの言動は、前後の脈絡もなく変貌するその不思議なリズムで、私どもを混乱させ、当惑させることがある。例えば、次のように。

――私の前を通り過ぎようとした子どもが、手に持っていた積木を一つ、ヒョイと渡してくれる。

「ありがとう」と私。

その子はニコッと笑って、「あのね、右の左の、中の奥です」と、はずんだ声で言う。

とまどっている私に、もう一つ、積木を渡すと、「ミルクです」「右の左の上です。」

私は、笑ってうなずいて見せるしか、すべがない。――

「一体、彼らは、何をしているのだろうか？」こんなとき、私どもに生じる極めて平均的な反応は、こうした軽い当惑と訝りであろう。「積木のミルクと、右、左という方向指示は、どんな関係にあるのだろうか？」

彼らは、いきいきと声をはずませて、疑いもなく楽しげである。従って、彼らにとっては、何かしら、意味のある行為に相違ない。とすれば……。そこで、私どもは、常識的な大人の常として、何かしら前後に脈絡をつけ、因果関係を見出そうと躍起になる。例えば、「積木をミルクと言ったのは、牛乳のカートンに見たてたのであろう。『右、左』という方向指示は、先日の遠足で、先生が牛乳の空き容器を捨てさせようと、方向を指示されたのを真似したのであろう」などと……。

これが、私どもの、一般的な「理解」のレヴェルではないだろうか。つまり、私どもは、事象を「物語」として、つまり、因果関係的に一貫性を持った意味のまとま

りにおいて把握することに、余りにも慣れ過ぎているのだ。と言うより、それ以外には、事象を受けとめるすべを知らず、それ以外には、意味が見出せないのである。

見知らぬ人にキャベツを一つ、渡す。そして、「難民救済のために、キャベツを売っていますが、一寸の間、預っておいて下さい」と言えば、かなりの人が預ってくれる。然し、「これは普通のキャベツです。何の意味もありません。預って下さい」と言うなら、ほぼ断られるであろう。[*1] これは、まさに、私どもの常識的な感覚が、物語性のないものに恐れを感じ、通俗的な因果律が解体されることに強い不安を抱いていることの証ではないか。因果関係のはっきりした殺人よりも、通り魔に対して厳しく反撥するのも、同様の理由によるものとされている。[*2]

それゆえに、私どもは、子どもたちのきれぎれの言動にも、何かしら前後の脈絡を見出し、辛うじて辻褄を合わせて、自身を納得させようとするのだろう。その結果、私どもは、不連続の面白さに、さらには断片の放つあの輝きに、盲目である場合が多い。一つ々々、あんなにもキラ〳〵と、子どもらの現在を輝かせているのに……。

◆　◆　◆

子どもたちは、彼らが全身的に表明するその肉体の言語において、通俗的なまとまりを拒否し、因果律によって整除された物語的意味の世界に亀裂を生じさせている。そして、それは、伝達可能なものだけを価値とする日常的秩序に対して、鮮烈な挑発としても位置づくのだ。

私は、ここに、現代の知性の動きとパラレルな、一つの方向を見るように思う。アヴァン・ギャルドの芸術運動が様々に試行し、また、学問の世界でも先端的な知性たちが模索を続けている方向。つまり、肥大化し、硬直化した因果論的合理主義を問い直し、可変性、非連続性を含んだ神話的、宇宙論的世界を、人間に取り戻そうとする動きである。

前衛演劇運動の旗手の一人で、異能の演出家として世界の注目を浴びる鈴木忠志は、「伝達可能なものだけを大切にした結果、無限に規格化し類型化した思考や感じ方から洩れてくるものだけ」[*3]に、人間的な可能性を見出し、体制的な秩序に束縛されない「己れ特有の形や言葉を持ちたい」[*4]と願って、衝撃的な舞台を世に贈った。彼は、その舞台で、言葉をコミュニケーションの道具としてのみ機能させる、つまり、意味を伝えるためだけに用いる近代劇の理念をくつがえし、意味以外のレヴェルを回復させようと試みる。従って、俳優の科白に、いかに懸命に耳を傾けていても、語られたことの意味は一貫したものとしては把握されず、ストーリーの要約も不能であった。俳優たちの言葉は、そして動きもまた、私どもの常識的な感覚からすれば、極めて不連続に発しられたのである。

それらは、「物語」を拒否し、「言葉を意味のレヴェルだけでとらえること」を拒否し、そのゆえの「全体」を破壊しようとする昏い意志に溢れていた。しかも、それでいて、その舞台は、単なる否定と破壊に終始せず、明きらかに、人間の新しい言葉や形の出現に手を貸していた。伝達可能なもの、合理的、日常的なものを拒否したことで、既成の言葉や形によっては伝わり得なかった世界が、俳優の肉体によって深層から立ち現われ、不連続で断片的に見える言葉や形が、新たな輝きを放ってみずみずと呼吸づいていたのである。それは、「破壊が同時に論理的にも感性的にも再生であり得るような仕事」[*5]であり、「伝達不可能なもの、不可視なものへの探究にはじまり、その実現にいたる」[*6]営みであった。

新しい演劇運動とそれをめぐるこの言説、これらの中に、私は、子どもの世界との著しい類同性を見る。子どもたちは、絶えず、「物語」を拒否し、「伝達」を拒み、「全体」を破壊する。ただし、彼らの場合は、「昏い意志」と言うよりも、「あわあわと新鮮な情熱」とでも言いたくなるのだが……。

然し、鈴木忠志が、既に築き上げられた秩序の中に「後から放り出された個人」[*7]として、「自分なりの形や言

葉にならない感じ方[*8]」を拒み、結果として既成の諸概念にメスをつきつけたとすれば、そして、それを「昏い意志」と把えるならば、子どもたちの「新鮮な情熱」もまた、「昏い意志」に裏打ちされていると言うべきであろうか。言うまでもなく、子どもらこそ「後から放り出された個人」であり、「自分なりの形や言葉にならない感じ方」に悩まされつゝ、「己れ特有の形や言葉を持ちたいと願う」存在に他ならないのだから……。

◆　◆　◆

――三歳児の級。一人の子どもが泣き出す。寄ってきた子どもたちは、「どうしたの？」とは問わない。

涙を拭いてやり、頭を撫でてやる。なかには、しっかりと閉じられたまま、大粒の涙を溢れさせている泣く子の両眼を、ギュッとおさえつけて、涙を止めてやろうとする子どももいる。

こんなとき、「どうしたの？」「何があったの？」という大人の問いかけは、子どもらの所まで届かない。そして、なきがらと化した言葉は、空しく地に落ちる。――

子どもたちは、原因を探るという形で過去へ視線を逸らさず、それとの関連で処置を考えようという一貫性をも拒否して、ただ、「泣いている現在」に、ひたと向き合う。とにかく、この友人は、現在、この場所で、「泣く」というありようで己れを語っているではないか。

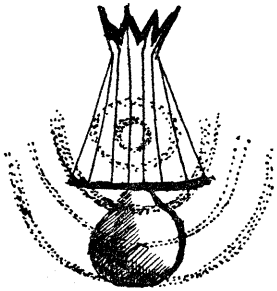
このとき、彼らの間では、「現在」という断片が、キラ〳〵と光を放っている。そして、泣いている子どもは、泣くことのさながらにおいて、しっかりと受け止められる。考えてみれば、「無前提、無条件に、他者を受容する」というこのありようは、人間にとって一つの理想ではないか。断片と向き合い得る子どもらの世界では、その理想が、瞬時の花を開かせるのである。

＊1、2　寺山修司、山口昌男の対談「劇の出現」「現代思想」一九八一年一〇月号所収

＊5、6　渡辺保「俳優の運命」講談社、一九八一年

＊3、4、7、8　鈴木忠志「内角の和」而立書房、一九八〇年

近代短歌に現われた子ども(二)



大塚　雅彦

(4)　伊藤左千夫

根岸派・アララギ派の鼻祖ともいうべき正岡子規やその弟子の長塚節は、共に独身で没したせいか、子どもをうたった作品はあまりないようである。それに比して、同じく子規門の伊藤左千夫には子どもを素材にした歌がかなり多く、しかも優れたものが少なくない。これは一つには左千夫が妻との間に実に十三人の子女を生んだ子福者であった（四男九女のうち、長男・二男・七女・三男・四男の五名は夭折しているが）ということもあろうが、左千夫の人生派ともいうべき歌風や、また、その豊かな人間性や、真情の溢れる人柄のせいもあったように思われる。左千夫研究家の永塚功日大教授は

「左千夫には本来熱情的な性格があり、それが一方では理性を抑えることのできないほどの激しい行為となってあらわれることがある」「何事にも激しく自己を燃やすような性格」（同氏著『伊藤左千夫研究』昭15・5）と述べているが、このひたむきな性格は例えば彼の晩年の恋愛や相聞歌にも現われているし、また、愛する子ども達を詠ずる際にも、率直に現われてくるのである。岩波版『左千夫全集第一巻』に収められた彼の全短歌作品を仔細に見てゆくと、早くから子どもを詠じた歌がかなり出てくるが、初期のものは概ね傍観的な詠出や、属目的な点景のように子どもをとらえているものである。しかし、明治34年作の「牡丹」という連作や「麻疹」の長歌などは、病児を対象にした父性愛を溢れさせ、子煩悩な彼のプロフィルを早くものぞかせている。また、友人たちが子どもを死なしめた際や子どもが誕生した際などに贈った歌が少なくなく、律気で友情に篤く、子ども好きな左千夫の性格を思わせる。街なかの歩みや散策の際でも、川舟で母親と共に父親の帰りを待つ水上生活者の子どもの心情を思いやったり、渡舟の渡守が唖の童児があったことに鋭く眼をつけて詠じたりして、ヒューマニティの溢れる作品をのこしている。明治39年の「蕾の玉」一連は左千夫に最も愛されたという五女由伎をモデルにしたものと思われるが、詞書に「世の中に幼きものをいつくしむ許り楽しく尊とくおぼゆるはなし」と述べているのはいかにも左千夫らしい。由伎さん自身「私が物心ついたころ、父は私を大へん可愛いがってくれました。子煩悩でやさしい父でした。……父と交際する人はみな、その人間的魅力にひかれたのでしょうか私の家に出入りしていた豆腐屋まで父を慕っていました」と述べた（春木千枝子著『伊藤左千夫』昭48・9）由である。まことに愛の歌人というべきであろう。

①かにかくに土にも置かずはぐくめば吾が命さへそこにこもれり

②よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして児等が遊ぶも

③七人の児等が幸（さき）くば父母はうもれ果つとも悔なくお

もほゆ

④暫くを三間打抜きて七人の児等が遊ぶに家湧きかへる

明治41年作で、「アララギ」一巻一号（同年10・13）に載った。明治四十年代の彼の作品になると、こういう傑作があらわれてくる。①の「かにかくに」は「あれこれと」「とにかくも」の意味。この歌については左千夫が信州の篠原志都児に次のように書き送っていることが参考になる――「多くの子を持ち辛き世に立つと云ふことは愛情の強いだけそれだけ悲惨な感が強い。我命さへそこにこもれり（傍点左千夫）と絶叫するに至るのである。読者がさういふ意味で読んでくれたもの一人もないやうだ。君すらも褒めてはくれても此一点を見てくれぬが残念である」。②や④はいかにも子どもの生態をよくとらえていて、幼き者の動きが眼に見えるようである。天候のよい日は庭で暴れ廻り、雨の日は家の中を割れるばかりにドタバタと走り廻って遊ぶ子ども――われわれにも皆幼時のこのような思い出がある。「三間打ち抜きて」などは、いかにも子煩悩で、子ども本位の家庭生活をした左千夫が偲ばれ、子どもの動きに眼を細めている彼の姿が髣髴とする。ちなみに、「左千夫は決して子ども達を叱らなかったという。妻のとくが子どもを叱ると、左千夫は〈子どもはのびのびと育てることだ〉と言ってきかせたという」（荒川法勝著『伊藤左千夫の生涯』（昭48・7）。女の子たちが男の子のように取っくみ合いをしても、左千夫は中に入って止めもせず、叱りもしなかったと伝えられるが、ここにも大らかな彼の性格がしのばれる。③なども、子をもつ親の真情をうたってみごとである。「幸くば」は「幸いならば」の意味。なお、この一連には「よきも着ずうまきも食はず然れども児等と楽しみ心足らへり」という歌もある。これも橘曙覧の「独楽吟」に通う趣きがあると思うがどうであろうか。また、この一連などは万葉集の山上憶良の発想を思わせるものがあるのも諸家の指摘するところ（谷馨著『現代短歌』昭26・12、その他）である。

⑤おくつきの幼なみ魂を慰めんよすがと植うるけいと

うの花

⑥数へ年の三つにありしを飯の席身を片よせて姉にゆづりき

⑦古への聖々（ひじりひじり）のことはあれど死といふことは思ひ堪へずも

明治四十二年作で、「アララギ」二巻三号（同年11・1）に載った。「吾児のおくつき」の題がある一連八首よりの抄出であるが、同年五月二十四日庭前の池に溺れて死んだ七女の七枝を悼んだ歌である。「ホトトギス」同年九月号に発表した「奈々子」はこの事件を題材にした小説であり、また後述の如く一周忌には「浮藻」七首を詠んでいる。一般に愛児の死を歎いた歌には悲痛なものが多いが、とりわけ子どもを溺愛した左千夫には堪えがたかったに違いない。小説「奈々子」の中で「真に愛するものを持たぬ人や、真に愛するものを死なしたことのない人に、どうして今の自分の悲痛がわかるものか。哲学も宗教も今の自分に何の慰藉をも与へ得ないのは、たうていそれが第三者の言であるからであるまいか。自分はもう泣くよりほかない。…わが子を見守って泣くよりほかは術はない」と述べているが、慟哭という語は、まさにこのようなことを云うのであろう。⑤の「おくつき」は奥津城、つまり墓である。⑥は、おしゃまな亡き幼児の食事の席での動作を具体的に描いているのが哀れを誘う。⑦は、「昔の聖人たちのこういう際の例などの話は色々と聞いてはいるが、どうにも死というものは堪えがたい思いのするものだ」という意味であろうか。仏教に凝った左千夫らしい作だ。

⑧み仏と変りし御名をささげ持ち吾がにひむろにうつしまつりぬ

⑨禍の池はうづめて無しと云へど浮藻のみだれ目を去らずあり

⑩人くれば人と笑ひてありといへど亡き児偲ぶに我がむね痛し

⑪汝（な）をなげくもの外になしいきの限り汝を恋ひまもる此の父と母と

明治四十三年作で「アララギ」三巻五号（同年6・

1）に載った「浮藻」という題の一連七首からの抄出であり、前述の如く七枝一周忌の作である。⑧の「にひむろ」は新築の家や室が語義だが、この場合は、茶道に凝っていた左千夫がこの一年の間に茶室を新たに作ったのであり、その唯真閣に亡児の位牌を移したことを示す歌である。⑨は亡児の死後、そのいまわしい池は埋めてしまったが、溺死の折の浮藻のみだれのさまが今も目を去らない、という歎き、⑩⑪は親の心情を吐露したもので、「いきの限り」という一語など強烈である。左千夫門下の土屋文明氏は、前出の「吾児がおくつき」一連については「事件そのものから来る重圧のためか、左千夫自らの言つた新しい境地にまだ入り兼ねた趣のやうに思はれる。寧ろ左千夫の素朴純情を知るべき一連」と言い、この「浮藻」の方は「時日が経つて居るので、感動が理に支へられたやうなところもあるが、その一面事件からの脱却があり、いくらかゆとりがみえて……」と述べている（同氏著『伊藤左千夫』昭37・7）。しかし辻村直は「前年の〈吾児がおくつき〉に比べると、この一連（大塚註「浮藻」のこと）の方が遙かに事件が眼立ち過ぎる傾はあるが、そこが反って如実であって人の心を引くのである」と、やや違った鑑賞をしている（斎藤茂吉・土屋文明編『左千夫歌集合評』（昭19・7）。なお、明治四十五年作の「招魂歌」一連に於ても左千夫は、生まれて僅か十三日で死なせた三男究一郎を悼む十二首を作っているが、多くの子を夭折させた彼の悼児挽歌は、いずれも心うつものがある。

⑫黒髪のうなゐふたりが丹のおものまろき揃へて笑みかたまけぬ

⑬みぎひだり背に寄りつくを負ひ並めて笑ひあふるる真昼の家に

⑭いとけなくめぐしき児等が丹のをもの輝くいまを貧しといはめや

大正二年作で、「婦人評論」二巻四号（同年2・15）に載った一連より抄出。「わが幸」の題と、「年明けてふみ児は四つ鈴子は五つ」の副題がある。八女鈴子と九女文の両女をうたったもので、ここにも子どもをひたすら

愛した左千夫の父性愛がにじみ出ている。⑫の「うなゐ」は髫髪で、子どもの髪の毛をうなじで束ねたもの、あるいは、子どもの髪のうなじのあたりで切りさげておくもので、転じて「幼い子ども」を指す。「丹のおも」はあかい顔で、りんごのホッペというところか……。この歌などは土屋文明氏は、通俗的で低調な歌の方であるように鑑賞しているが（前掲『左千夫歌集合評』）、私などは、やはり忘れがたい作品である。⑭の「いとけなく」は「あどけなく、がんぜなく」の意、「めぐしき」は「可愛いらしき」「いとおしき」の古語。この一連についてはやはり左千夫門の斎藤茂吉は「以上五首は、秀歌を目ざすやうな意図がなく、楽しんで歌ひ上げて居る点に注意すべきであつて」と述べている（前掲書『合評』）が、それだけに左千夫の人生観や倫理観が自然流露的にあらわれているのではあるまいか。

左千夫は私の最も好きな歌人の一人だけに思わず力が入って、多くの筆を費してしまったが、彼の子ども詠は近代短歌史にのこる佳品と私は信じているものである。

(5) 佐佐木信綱

「竹柏会」を結び「心の花」を創刊した信綱は、多くのすぐれた門弟歌人を育て、また国文学者、歌学者としても知られたが、その歌風は温和、重厚、典雅で、おおらかであり、「広く深くおのがじし」ということを標榜した通りである。生涯にわたって十二冊の歌集をのこした。

①破れたる傘（からかさ）さして子等ぞゆく古き駅の雨のゆふぐれ

②順礼の親子のすがた山に入りて青葉がくれの補陀落の声

③幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

④年とへば手をひろげても見する哉（かな）うつくしき子よ汝（な）が家いづこ

第一歌集『思草（おもいぐさ）』（明治36年刊）より抄いた。清新な

歌風と浪漫的な心情が盛られた歌集で、明治三十年代に旧派和歌に対して新派和歌の旗頭として登場した人のものだけに、こんにち読んでもみずみずしいが、子どもを素材にしたものも、なかなかユニークである。①は古い駅(うまやと読ませる)の雨の景で、破れ傘をさしてゆく子ども達を提示した発想は、当時としてはフレッシュなものであったと思われる。②は順礼の親子をとらえている。こんにちではあまり見かけなくなったが、私の幼時には、よく親に従って歩いて行く子どもの白衣の順(巡)礼姿を見かけたものだ。諸方の聖地、霊場等を参拝して廻るのである。私はもの悲しいような気持で、いつまでも子どもの順礼姿を見送ったのを思い出す。「補陀落」とは観音が現われたという霊場で、もともと印度の南端にあるといわれたが、中国や我国では観音の霊場を指すのに用いられるようになった。熊野地方の補陀落渡海の説話などは有名である。なお『思草』は「六部一人しづの男一人馬の上ゆ見ゆるあぜ道ただ春の風」の如く六部をうたった作品もある。六部とは書写した法華経を一部ずつ日本六十六ケ国の霊場に納めるために遍歴する行脚僧で、これも最近は見かけなくなった。③「どち」とは同類をいう接尾語で、同士・仲間の意味。子ども同士が語り合っている添景に葡萄の樹があり、そこに月がかたぶいたという状景で、当時としてはいかにも新鮮な歌材、みずみずしい詠風であった。④は幼な児に「幾つ?」と問うと掌をひろげて指で答える、更に「お家どこ?」と問いかける、そんな幼児との問答をしている場面が眼に見えるようだ。「うつくしき子」とあるから、女の子の感じである。

⑤女の童柄香炉ささげまうのぼる長谷の御寺の山ざくら花

⑥よく踊る旅芸人が小さき子の行末かなし山の湯の秋

第二歌集『新月』(大正元年刊)より抄出。『新月』には自由奔放の詠風が加わり、また、題材では生活に即したものがうたわれ、用語や調べも奔放になった面がある。⑤は牡丹で名高い長谷寺がうたわれている。「柄香炉」というのは把手のついた香炉である。童女がそれを

捧げて詣でのぼってゆく、背景としては山桜花が咲き盛っているというので、絵のように美しい光景である。いかにも古典や有職故実に造詣深い作者の歌らしい典雅にして優美な作である。⑥は感傷をふくんだ抒情的な歌である。私はこの作に川端康成の「伊豆の踊り子」を思い出すのだが、どうであろうか。旅芸人の小さい娘への哀憐の情が溢れているのである。

⑦四つといふ子が目の澄みの深きかも廃頽の風景うつる事なかれ

⑧講堂にあふるる幼な生徒らをみまもるわが目涙にじみく

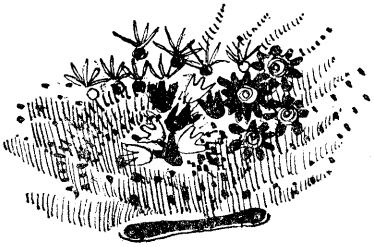
信綱の第十歌集『山と水と』（昭和26年刊）より抄出。この書は、多くの信綱歌集の中で戦後の作品を代表するものである。妻を悼む挽歌をふくみ、旅行詠も多いが、また、知性的なものや思想的内容、人生観などを詠みこんだ歌も少なくない。⑦などはそれで、四歳の幼児の澄んだ眼に戦後の頽廃した世相風景など映るなと、思念的なものをうち出している。⑧は「小学校にて」という題がある中の一首で、伊勢の石薬師が信綱の郷里であるが、旧宅の跡は小学校の敷地の一部となったようで、その小学校で講演でもした折の作品であろうか？　幼い生徒らを見守り老いの涙をにじませている作者の姿が目に見えるような歌である。

（お茶の水女子大学）

〈13ページより続く〉

本稿を着想した筆者の脳裡には、実は他ならぬ「人間科学」の論議ということがあったのだが、いまもしサイエンスが理学であったとしたら、これもさしづめ「人間理学」の論ということになり、さながら「社会理学」や「行動理学」などというのとも同じで、ことがらははや単に語感の問題だけに止まらなくなるのではないかという問題である。前時代の「理学」はあながちその方正な字面、凜然たる語音ということを離れても、先進の演繹的精神科学との因縁から、何か概念上の余計な桎梏を帯びていたのかも知れないという感が残るのである。新興の「科学」は、名義としてはたとえお粗末な選択だったとはいえ、サイエンスをそうした旧理学の桎梏から解放して、生物や人間対象の探究へと門戸を開こうというスローガンを意味していたのだろうか。この点の検討については、科学哲学を専門とする方々の高説をまつほかない。サイエンスを科学というその科の字とは何か。われわれはもはやその問題は御破算にして、科学はただの「カガク」でよいのだという時点まできている。ただそのカガクが、旧来の理学の軌範からどこまでみずからを解放してよいのか、ということが、今後の具体的問題となるかと思われる。いまはここまでのところで締めくくって置きたい。

幼稚園教育課程の変遷と幼児教育の課題



石出恵豊

一、明治時代の保育課程

わが国における最初の幼児教育の制度的規定は、「学制」（明治五年）中の幼稚小学で「男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教フルナリ」として、小学への就学前教育を位置づけていた。

しかし、実際に幼稚園が発足したのは、明治九年十一月に東京女子師範学校に、附属幼稚園が開設されたのが最初である。

当時の幼稚園での目的は、「天賦ノ知覚ヲ開達シ固有ノ心思ヲ啓発シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ暁知シ善良ノ言行ニ慣熟セシムル」というものであった。

ちなみに同校六十年史をみると次のような保育課程となっていたようである。〈資料①参照〉

ところで、埼玉県の幼稚園は、明治十七年に埼玉県立師範学校附属小学校幼稚保育科設置から発足した。

同校の幼稚保育科規則をみると次のような保育課程となっていた。〈資料②参照〉

〈資　料①〉

登園 整列 遊戯室―唱歌 開誘室―修身話か庶物話（説話あるいは博物理解）、戸外あそび 整列
開誘室―恩物―積木 遊戯室―遊戯か体操 昼食 戸外遊、開誘室―恩物 帰宅

〈資　料②〉

附属小学校幼稚科時間表雛形

一ノ組

日／時	月	火	水	木	金	土
自九時半至十時	会集	〃	〃	〃	〃	〃
自十時至十時二十分	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話
自十時二十分至十時五十分	読ミ方	数ヘ方	読ミ方	数ヘ方	読ミ方	読ミ方
自十時五十分至十一時十分	唱歌	〃	〃	〃	〃	〃
自十一時十分至十一時四〇分	木ノ積立	板排へ	木ノ積立	箸排へ	木ノ積立	豆細工
自十二時四十分至一時	遊嬉	〃	〃	〃	〃	〃
自一時三十分至二時	画キ方	書キ方	画キ方	書キ方	画キ方	
	紙織リ	縫トリ	紙摺ミ	紙剪リ	縫トリ	

二ノ組

日／時	月	火	水	木	金	土
自九時半至十時	読ミ方	数ヘ方	読ミ方	数ヘ方	読ミ方	会集
自十時至十時二十分	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話
自十時二十分至十時五十分	会集	〃	〃	〃	〃	〃
自十時五十分至十一時十分	唱歌	〃	〃	〃	〃	〃
自十一時十分至十一時四〇分	木ノ積立	板排へ	木ノ積立	板排へ	木ノ積立	豆細工
自十二時四十分至一時	遊嬉	〃	〃	〃	〃	〃
自一時三十分至二時	画キ方	書キ方	箸排へ	書キ方	画キ方	
	紙織リ	紙摺ミ	珠繋キ	紙摺ミ	紙剪リ	

二、大正時代の保育課程

大正時代は期間的に短く、比較的平和な時代であったので、幼稚園教育にも自由化の傾向がみられた。

その例として、三原女子師範学校附属幼稚園の園外保育の例が典型的なものである。〈資料③参照〉

次に埼玉県内の市町村立幼稚園は、大正十四年一月に設置認可された本市の幼稚園が最初のものである。

加須幼稚園の保育課程は次のようなものであった。〈資料④参照〉

〈料　資③〉

四月　摘草（本校の山、滝の宮方面、れんげ、すみれ、はこべなどの採集、行程約五～六町）
五月　摘草、川遊び、潮干狩
六月　田植、螢狩
九月　秋の虫、山中方面への虫の採集
十月　摘草、遠足、秋の山
十一月　秋の山、どんぐり拾い、きのこ狩
三月　梅見

保育課程及時数左ノ如シ

〈資　料④〉

保育項目＼学年	第一学年 毎週保育時数	第一学年 課程	第二学年 毎週保育時数	第二学年 課程	計
遊戯	六	簡易ナル表情遊戯、競争遊戯、律動遊戯、自由遊戯	六	同上	
唱歌	三	平易ナル歌曲ノ唱へ方	三	同上	
談話	三	簡易ナル童話、作話、史談、事実談、庶物談、関係ニ関スル談話	三	同上	
手技	九	簡易ナル積方、排方、繋方、貼方、摺方、豆細工、描方	九	同上、剪方、折方、掛方、粘土細工	
計	二一		二一		

三、現行の教育課程

現行の幼稚園教育課程は、昭和三九年三月二三日付告示の文部省「幼稚園教育要領」の規定に基づくものでその内容の概要は次の通りである。

1、健康

(1)健康な生活に必要な習慣や態度を身につける。

(2)いろいろな運動に興味をもち、進んで行なうようにする。

(3)安全な生活に必要な習慣や態度を身につける。

2、社会（省略）

3、自然（省略）

4、言語（省略）

5、音楽リズム（省略）

6、絵画製作（省略）

以上、幼稚園の教育課程の変遷について考察を加えずダイジェスト的に、しかも資料提示の形で述べてみた。

このような教育課程の変遷を経てきている今日の幼稚園教育は、多くの課題をかかえている。

たとえば、施設の整備、父母負担の軽減、教員の待遇、教員養成、幼稚園と保育所との関係、幼稚園教育と家庭教育との関連など解決すべき課題は極めて多い。

どの問題も重要であるが、本稿では教育課程との関連を考え幼児教育のあり方をめぐる課題について次の項で述べてみたい。

四、幼児教育のあり方をめぐる課題

1、幼児にとって幼稚園はどういうところなのか

幼稚園の教育内容・方法について、知育中心か、遊び主体かの論議がある。

つまり、小学校教育への準備段階として知識やしつけを重視する「教え派」と心や体の自由な発達と社会生活への順応を目指す「遊び派」の二つの流れがあり、幼稚園側だけでなく、親たちの間でも意見が対立しているのが実情のようである。

すなわち、ある幼稚園長の「テレビを中心とする情報社会にあって、現代の幼児は自然に数やことばなどへの関心を高めている。それを放置するより、系統的に伸ばしてやった方がよいのではないか。読める書けるといった評価でなく、身につけた社会的機能としてというような意見に代表される「教え派」の意見がある。

一方、幼稚園教育と小学校教育との関連を追跡調査しているある小学校の教師の「小学校低学年では、知育型

幼稚園の出身児は、学力に優り、遊び型幼稚園の出身児は、自主性に優るという特徴がみられるが、四年生以上となると学習面でも行動面でもほとんど差がなくなってしまう。」というような意見もある。

しかし、大事なことは、人間形成に不可欠の幼児教育のあり方を考える場合、「知育中心」か「遊び主体」かの二者択一論ではなく、それを弁証する意味において「幼児にとって幼稚園とはどういうところなのか」という原点を問い直してみることが必要ではないだろうか。

広島大学名誉教授荘司雅子氏が「世界の幼児教育」という論文で「……日本のように幼児の早期教育とか能力開発とかいったおとなの考えで幼児を教育するのではなく、幼児期の発達課題を幼児が自ら解決するように導くことが、幼児教育であると考えている。そして保育所や幼稚園は、あくまでも幼児のための生活の場であり、生活や体験による学習の場であって、たんに知識を習得するための勉強部屋ではない。」と述べている。

欧米の幼児教育はそのような教育理念で実践されているようである。このことはわが国の幼児教育の現状を反省する上で極めて重要な考え方である。

2、幼児の生育と親の養育はどのように変化しているか

幼児教育のあり方を考える場合、まず、幼児の生育と親の養育の変化の実態を認識することが問題ではないだろうか。

たとえば、私どもが子どもの頃は、生まれてすぐに出会ったのは母親の乳房であった。その乳房から自らの口で力いっぱい吸い取らねばならなかった。母親の乳房にしがみついて自らの糧を必死になって獲得したものであった。ところが、今は産院で看護婦の手から消毒された哺乳びんで乳があてがわれる。自ら求めなくても時間がくれば栄養たっぷりの乳が補給される。しかも何となく口を開ければよい。つまり、生きることの基本が大きく変化しているのが実態である。

現在ではわが国の五歳児の約九〇%が集団施設での教

育（保育）を受けている。このことは本来家庭で行われなければならない教育を幼稚園や保育所にゆだねてしまっている。いわゆる「家庭教育の外在化」の傾向をもたらせている。それは一つには、婦人の職業進出による労働条件とのかかわりもあろうが、別には子どもを犠牲にはしないが、自分も子どもの犠牲になりたくないというように考える傾向も著しくなっているのではないだろうか。その現象としてみられるのがベビーホテルの繁盛ではないかと思われる。

なお、幼児をもつ親の層が終戦後の教育混乱期に教育を受けてきただけに、子育てのとまどい、子どもをしつける方法もよくわからない人々が案外多いのではないだろうか。このような現実は、親としての考え方の変化だけでなく子どもの育て方の変化であり、幼児の生育の変化でもある。

幼児教育に携わる者は、このような幼児の生育の変化と親の養育の変化の実態を認識して教育課程を編成し、実践することが必要であろう。

3、幼児が手を使うことは教育的にどのような意味があるのか

日本教育学会の幼児教育部門でよく論議される「最近の子どもは不器用である」ということについてであるが、このような問題を「鉛筆を削れない」から不器用であるというような現象的な問題としてではなく、人格形成の面から考えてみることが必要ではないだろうか。

このことについては、マリア・モンテッソーリの教育理論から学ぶことができる。すなわち、「子供の知能は手を使わなくてもある水準に達する。しかし、手を使う活動によって子供の知能はさらに高められ、その性格は強められる。逆に子供が手を使える物を見いだせず、手を使って周囲にかかわる機会をもたない場合、また、手を使いながら深く集中する体験をしたことのない子供は、幼稚な段階にとどまり、人格は極めて低いものとなる。そんな子供は、素直になれなかったり、積極性を欠いたり、無精で陰気な性格になってしまうのである。と

ころが自分の手で作業できた子供は、明瞭な性格とたくましい発達を示す。」(モンテッソーリ著「吸収する精神」より)という論旨である。つまり、子どもが手を使いながらいつのまにか人格を成熟させていくという仮説(理論)を、幼児教育の実践方法として取り入れてみることも大事なことではないだろうか。

4、幼児にとって「自然」はどのような価値をもつものであるか

文部省の「幼稚園教育要領」では、幼児に対する教育目標を達成するために必要な内容として、先述のように六領域を示している。そのうち「自然」は六領域の一つとして並列的に示されている。

ところで、「自然」は幼児の人間形成にとって大きな影響力をもっていることからも、教育課程の編成と教育方法のなかで重視すべきであろう。

島根大学教育学部長の近藤正樹氏が、「幼児教育の今日的課題」という論文で、「①人間への解放、②自然への解放、③学校への解放、④機能集団への解放、⑤未来への解放」を提言している。

そのうち「自然への解放—原点への復帰—」という一節で次のように指摘している。

「今日の子供、とくに幼児はさまざまな仕方で自然を喪失してしまっているといっても過言ではない。『テレビっ子』といわれ『まん画っ子』といわれ『鍵っ子』といわれ、また『塾っ子』ともいわれる今日の子供の姿は、そのまま自然喪失、人間性喪失の別名だといってもよいであろう。しかも見逃してならないことは、こうした現代っ子の気質が決して都市地域、過密地域に限らないということである。過疎なるがゆえに近隣に遊び相手をもたない。いきおい家に閉じこもってテレビやまん画に明け暮れる。恵まれた自然環境の中にありながら、自然そのものを喪失しているのである。」

このことは、自然という言葉の原意が、創造とか生産を意味すると言われることからも、幼児教育のあり方のなかで反省すべき重要な課題である。

たとえば、幼稚園の教育環境づくりとして、自然園や雑草園などを造ることも一策であろうが、先述したように大正時代のものではあるが、三原女子師範学校附属幼稚園の園外保育の実践も「温故知新」の教育的意義をもつものではないだろうか。

5、幼児教育は人間形成にどのような意義をもっているか

先述のモンテッソーリの手作業を通じての人格形成論にしろ、近藤正樹教授の自然への解放論にしろ、まず幼児が人間としてたくましく生きぬく力、生きることを求める能力を育てる幼児教育のあり方にもつながる重要な考え方である。

幼児の脳の重量は五歳までに、おとなのそれの八割までに成長するという事実、また、五歳までに、その生まれ育った文化環境のなかで生活するためのライフ・スタイルを身につけるという研究や調査の結果がある。

すなわち、人間らしい人間としての生き方、いわば人間としてのライフ・スタイルを身につけることができるのは幼児期だけであるということを考えると、幼児教育は、小・中・高・大学の教育にも増して重要な位置をしめることになる。さらには、幼児教育は生涯教育の基礎として、人間形成に不可欠の教育とも言えるわけである。

そこで、先述の荘司雅子教授の「……幼稚園は、あくまでも幼児のための生活の場であり、生活や体験による学習の場であって、たんに知識を習得するための勉強部屋ではない。」という幼稚園の本質的な性格・教育機能を再検討して、幼稚園教育を充実することが今日的課題ではないだろうか。

（埼玉県加須市教育委員会）

〈参考文献〉
①荘司雅子著「幼児保育の原理と方法」（フレーベル館）
②坂元彦太郎著「幼児教育概説」（同館）
③K・H・リード著・宮本美沙子・落合孝子共訳「新版・幼稚園」（同館）
④大場・海・平井・本吉・森上共著『課題』とは何だろう」（同館）
⑤西村省吾他編著「教育課程と指導計画」（同館）
⑥モンテッソーリ著・吉本二郎・林信二郎共訳「モンテッソーリの教育」（あすなろ書房）

山と不連続

浪川七五朗

東京の西端近くの私の住む団地からは、奥多摩の山々が良く見える。とくに冬の朝や夕方などは、山々の連らなりがあまりにもはっきりと見えるので、ずい分と辺ぴな東京に居るのだなあと思いながらも、山が近くに見えるということで嬉しくなって来たりする。

私が山に興味をもち初めたのは中学生のころからで、そのころの冬の晴れた日など、奥多摩・丹沢・富士山などの山々が、頂き近くを白くして連らなっている様子が学校の校舎の階上から良く眺められ、時には遠く南アルプスの山々が、いかにも雪が深い白さで見えた時もあった。そして、それらの山なみの美しさとともに、山の向う側はどんな風になっているのだろうか？　どんな生活をしているのだろうか？　などと考えたりしていた。

東京から中央線で松本方面へ行くと、列車は高尾をすぎたあたりからトンネルをくぐって奥多摩の山をこえ始める。そして勝沼・塩山あたりから甲府盆地に向けており始める。夜行列車に乗っていると甲府の街が眼下に輝いて見える。甲府盆地の西のはずれ、韮崎をすぎるあたりで列車はまた、信州と山梨の県境の高原地帯をめざして高度をあげる。夜に韮崎の町の北側の高台から線路のある方向を眺めていると、こんどは夜行列車がきれいな光をはなちながら、まるでゆっくりと星空めざして昇っていく様に見える。本当にきれいだ。そんなふうに盆地をはさみながらも、山々は起伏をもって連らなっている様にも見えるが、韮崎から西の日野春のあいだの塩川をはさんだ線路の対岸には断層があり、列車の窓からも良

く見え、川をはさんで北側の奥秩父・八ッ岳と南側の南アルプスとでは、ここでとぎれているんだといわんばかりに見える。このやや赤味がかった灰かっ色の崖になっている同じ光景をどこかで見たと思っていた。何かに似ていると。それは氷河の末端に良く似ていた。アラスカの氷河の上を軽飛行機で見ると、氷河が川になる地点でやはり、あの崖と同じ様な切れ口であった。

山の頂きから白くゆっくりと流れている様に見える氷河も、列車の窓から眺めている山々も、ときとして、とぎれる地帯を見ることが出来る。それは不連続というよりは、ひとつの流れのとぎれにしかすぎない。しかし、その氷河を実際に頂きに向けて登ると、不連続と表現する様なものにあたった。セラミック帯とよばれる、雪(氷)の団塊が高度差をもって滝の様になっていたり、クレバスが氷河上を何本も入り組んで、氷河を寸断したりしている光景である。

私は、山での不連続といわれるとき、この様な氷河の状態や、断層や谷、そして氷河から川・海へと水の流れがすぐに思いうかんだ。静かにどっしりとかまえている山と、たえず流れつづけている水。動きはまるで対照的でありながら、両者は密接で、しかも山は水によって少しずつたえまなく、変化させられている。今年の梅雨あけごろ、南アルプスの北岳にあるバットレスという岩場で、畳一枚半位もあろうかと思われるテラスが落ちてなくなっていてびっくりした。あんなにもがっしりとした岩場が崩れてしまうとは。雨水によって少しずつ侵され、突然に崩れたのであろう。山は静かな時の流れの中に、不連続な動きのものを含み、少しずつ変化しているといったら良いのだろうか。私が不連続、あるいはとぎれとして思いうかんだのも、実は連続と不可分で、自然の動きはきっと連続と不連続がひとつの流れになっている様な気がする。

*　　*

不連続

根本　茂

もうかなり前になるので、いつのことであったか忘れたが、気象学会で、講演者と質問者との間に次のようなやりとりがあったことをいまでも時々思い出す。「風とは一体なんですか」「風は空気の流れです」「空気は分子で構成されているのではないですか。その空気分子の動きをどうやって測るのですか」「風速計で測定します」「風速計で空気分子の動きが測定できるのですか」そのあとの議論もあったように思うが覚えていない。

確かに大気は個々の空気分子、もう少し厳密に言うと、酸素、窒素の分子と微量の希ガスの分子の集まったものであり、微視的には個々の不連続な分子の集合体ということになる。風はその個々の分子の集合体の運動であるが、地表付近では分子の数が非常に多く、巨視的な立場で、これを連続体として取り扱っている。従って、その連続体としての空気の動きを風速計で測って風速なるものを求めているわけである。しかし、次第に高度をあげて上空へいくとどうなるであろうか。

空気は大気の下層では非常に濃いが、上空へいくに従って薄くなる。地表付近では、空気分子は、一回衝突してから次に衝突するまでに平均して約一万分の一ミリメートル走る勘定になる。ところが、地上一〇〇キロメートルの高さになると、平均して二二センチメートル、五〇〇キロメートルの高さになると二三キロメートル走って、次の分子に衝突することになる。これではも早や空気を連続体とみることはできない。そうすると、風とは一体なんですかと質問したくもなる。

先に、地表付近では空気は連続体として取り扱われていると述べたが、それでは気象でいう不連続線とは一体なんなのかということになる。言いかえると、連続体の中にどうして不連続性が現われるかということである。不連続線はまた前線（フロント）とも言われている。このフロントという名称は、第一次大戦末期に、ノルウェーの気象学者ビヤークネス父子らの研究グループがつけたものである。当時ノルウェーは中立国であったが、ノルウェーの国外では、塹壕で向き合った大軍が時々激しい戦闘を交えていた。彼らは異なった性質を持った空気の塊、すなわち、気団を軍隊に見たてて、フロントという名前をつけたのではないかと言われている。彼らの言うように連続体とみなされる気団の持つ性質はその気団の生成された場所の相違によって異なっており、それらの気団の接触しているところでは、風向、風速、気温、温度などの気象要素が急激に変化し、巨視的な立場でも不連続性があることが認められる。

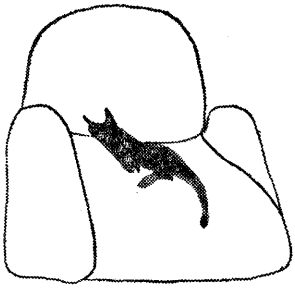
微視的にみれば、本質的に不連続である個々の分子で構成される空気が、巨視的には一つの連続体として取り扱われ、その運動は流体力学の法則に従い、一方、巨視的にみて連続体として取り扱われる空気の塊自身にまた不連続性が現われるというのは、本質的なものは変わらないのに、われわれが自然現象を取り扱いやすいように、その場合、場合に応じて見方を変えているためである。不連続、連続という概念も、この場合、自然現象を理解しやすくするために便宜的に導入した概念に過ぎないということになる。

少々理屈ぽい話になってしまったが、人間の社会においても同じようなことが考えられるのではなかろうか。個々には不連続な個人が集まって一つの連続体になる。その連続体の構成される場所の相違によって、異なった民族、その民族と領土によって一つの連続体である国家が構成される。そして国家はそれぞれ固有の性格を持つようになる。しかし同一民族の中にも思想を異にするグループがあって互いに争う場合、そこに一つのフロントが存在し、一方、国家間にも思想、利害関係などが違う

ため、そこにもまたフロントが発生する。地球を取り巻く大気を眺めると、あちらこちらにフロントが存在し、停滞したり、激しく活動したりしている。同じく地球上に存在する国と国との間のフロントにも停滞的なものと活動的なものとがある。

このままでは、人類の危機はいつまでたってもなくならない。一度不連続な個体に戻し、再構成のうえ、一つの連続体を作りあげ、せめて人類の世界からだけは不連続をなくしたいものである。

（お茶の水女子大学）



木の裂け目

大橋利恵子

園舎新築の為に仮園舎で生活していた頃のことです。園舎のすぐそばに、いちょうの木があり、その根元に子どもが手を入れるのにちょうどよい裂け目がありました。ある日、K君と2～3人の女子たちが運動場の土をそぎとり、固いおだんご作りにはげんでいました。水をつけて固め、かわいた砂をかけてはまた水をつけて、おだんごは着実に固くなっていきます。手でこするたびに黒びかりするおだんごはまさに「宝物」です。そのうちにK君が何を思ったか、突然、そ

の裂け目におだんごを入れ「これ、冷蔵庫、中でおだんごが固くなるんだ」と言いだしました。しばらくして、おもむろにおだんごを取り出すK君「ほら　固くなった」目をかがやかせて報告するK君につられて、女の子たちも次々にその冷蔵庫におだんごを入れはじめました。その作業がひととおり終わると、こんどは、その冷蔵庫が遊びの中心となり、いつしかおだんご作りはおうちごっこへと移っていったのでした。かたづけの合図があって、みんながあわただしく動き始めると、K君を中心に女の子たちは、その冷蔵庫の中にだいじなおだんごをしまって保育室に帰って行きました。

よくある遊びですが、それを見ていた私はその裂け目が本当に大切な冷蔵庫のような気がしていた子どもたちの気持ちが伝わってきたのでしょうか、すっかり、ファンタジックな気分にひたっていました。木の裂け目は何故か、そこから入りこむと中には広い空間があるような錯覚をもたらします。そこから入っていくと、自分の好きな世界へ続いていて、すぐにそこにいける。その裂け目がそんなトンネルの入り口だったら、どんなにすてきでしょう。

木の裂け目というより、木、そのものの話になりますが、さとうさとるさんのお話に、『おおきなかぶがほしい』という作品があります。おおきな、おおきな木があって、一番下の枝まではしごで登ります。その次の枝までも、小さなはしごがついています。

「二つ目のえだにのぼると、木のみきに、ぽっかりほらあながあいているのです。ちょうどかおる（主人公の名前）がもぐりこめるぐらいのおおきさです。そこにはいるとほらあなはずっとうえのほうにつづいています。『ほらあなのなかにも、はしごをつけてあるんだよ』（中略）ほらあなのなかのはしごをせっせとのぼると……おや、いきなり、ちいさなかわいいへやのなかに、ひょっこりはいってしまいます。」

かおるはその部屋で、お料理をしたり、本を読んだりします。木はさらに上の方に続いていて、ことりやりすの家があったり、見はらし台があったりする。そんな木

がほしいというお話なのですが、とてもほのぼのとした作品です。いかにも、実際にあり得ないことではないような気分にさせてくれます。そういわれてみると、どこでか、木の中にもぐりこめる大きな木があったような……。

まんがなどで大きな木の根元が動物の家になっていたり、トンネルになっていたりするのはよく見られます。現実に、ことりやりすが木の穴を利用して巣を作っていることはあるのでしょう。残念なことに私は実際に見たことがありません。

一本の木の裂け目、そこをうまく利用していろいろな空想がなされ、遊びが展開される、なんとなく楽しいことではないでしょうか。幼稚園に本当に、かおるが考えたような大きな木があったら、なんとすてきなことでしょう。そんなことを思うのは、私がまだ幼いからでしょうか。でも、こんなファンタジックな世界を、そして、こんな想像性豊かな遊びを大切にしていきたいなと思う今日、このごろです。

（岐阜）

他者と共にいることが嬉しい間柄を

杉田　稔

編集部から、不連続、亀裂、裂け目について寄稿を求められた。

ちょっと見廻せば、この世は到るところ分裂、対立だらけに見える。

国際間には米ソの対立、持てる国、持たざる国の対立、産油国対非産油国、イスラエルの国の存在を認めるかどうかをめぐってのアラブ諸国間の分裂も耳新しいし、国内でも同和問題や障害者問題、自衛隊の存否をめ

ぐる対立もあれば公共用地の取得をめぐる対立もある。古典的な労使対立、労働運動間の対立、派閥間対立など数え上げるにいとまもない。

社会最小単位の家族の中にも、嫁姑に限らず親子や夫婦の間すら断絶と対立があり、自らのグループを団結させるためになら、わざわざ第三者を敵に仕立て上げるも辞さないのが現代社会ではなかろうか。

そういう自分を顧みて見れば、「あの人さえいなければ……」のさもしい心が、自分の中にも巣喰っているのに愕然とさせられる。

ところで二千年前、遠いユダヤの地に生きていたイエス・キリストは、この現代のわれわれにも通じる「人間の現実」をしっかりと捉えていたようである。

その言行を味わい返して見ると、彼のする事なす事、語る事のすべてが、人々の反目を回避させ、疎外し合う人々に手を握らせる事に、また、和解のために心すべき事を示すにあったように思える。

よく思い出される「右の頬を打たれたら、左の頬も向けなさい」（マタイ5の38以下）も、決して消極的な無抵抗主義ではなく、正義の復しゅうを肯定したら最後、和解はなくなる。なぐり返したい衝動を押さえて、それで相手の気が済むなら、もう一つ打たれても、仲直りしなさい。と言っているように取れる。

「『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられて来た。だが、私は言う、敵を愛し、迫害する者のために祈れ、それでこそ、天の父の子なのだ。

天の父は悪人の上にも、善人の上にも、太陽を上らせ、また雨をも降らせて下さっていられるではないか。」（マタイ5の43～45）

「さばいてはならない」（マタイ7の1～5）の教えも、他人にレッテルを貼ったら、差別や疎外が生れこそすれ兄弟として受け入れるのは難しくなる。

それは、姦通の女が石打ちにされようとした時、「省みて罪なき者から石を投げたらよい」と言い、一人減り、二人減り、遂に全員立ち去った後、「私もお前を罪に定めない、ゆけ、二度と罪を犯すな」と告げたエピソ

ードの中のキリストを見れば、その人の過去にこだわってレッテルを貼るのでなく、その人の未来に希望をかけるのでなければ、対等の人間として受け入れ難くなる、という事を身を以て教えたように見える事からも言えるであろう。（ヨハネ8の1～参照）

他人に譲る？　とんでもない、損をしてしまう。そんな事できっこない！

人はキリストの呼びかけを前にためらい、そんな自分を正当化するために、凡ゆる理由を並べる。今も、昔も同じような理由を。

キリストは答える。「人間にはできない事でも、神には（させる事が）できる。」とも、「先づ神の心を行えそうすれば、必要なものは神から与えられる」また「人間の目に良しとされる事と、神から良しとされるものとは同じでない」とも。（マタイ19の26・6の33ルカ16の15参照）

×　×　×

電車の中で見かけた情景です。

「そうよ、そうなのよ、ママ」

「そうだったの、やっと分ったわ」

見交す二人の顔がパッと輝きました。

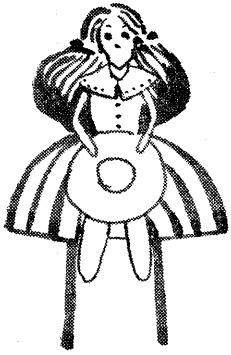
たまたま居合せた私にも、目の前の親子の幸せが、何かほのぼのと温いものとして、伝って来ました。

そして、コートの襟を立てゝ晩秋の道を歩みながら、私はしみじみと思いました。

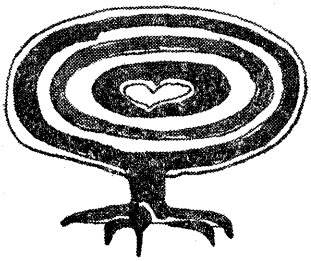
あの親子の顔の輝きは神の喜び、神の栄光の照り返しではなかったろうか、と。

そして、この木枯しの吹きすさむ世界の、到るところに、相互の理解と、パートナーとしての受け入れ直しとが、新たにされてゆきますように、……、と。

（カトリック東京教区司祭）



エリクソンと幼児教育 (10)



仁科弥生

自我の成長と遊び

フロイトが大人の無意識に至る王道は夢の研究であると信じていたように、エリクソンが子どもの自我を理解する最善の道は、遊びの研究であると考えていることは『幼児期と社会』の中ではっきりと示されている。たとえば、彼は『トム・ソーヤーの冒険』の中のベン少年の遊びを例にあげて、子どもの自我の能力のたくましさに言及している。

すなわち、ベン少年は道の真中で、蒸気船ミズーリ号の河下りの遊びに熱中する。彼は最上甲板に立っている自分の姿を心に描き、命令を発し、そしてその命令を遂行する。彼は船長であり、船であり、そしてエンジンベルである。このようなベンをエリクソンは次のように分析している。成長しつつある少年ベンは心身の発達が少しずつ違う速度で進むいくつかの部分に分割されている。まず、ひょろひょろと伸びていく自分の身体を制しかねている。また少年は自分の分裂した心に戸惑ってい

る。たとえ方便のためとはいえ、善良な少年でありたいと思う。それでいて、いつも悪いことばかりしている自分である。造反を企てるが、結局は服従している自分である。時間的展望は近づいてくる成人期をかいま見せてくれるが、現実の自分はまだ子どものように振舞っている。このようなベンにとって、この遊びには次のような意味があるという。

遊びの中で、頭脳（船長）、神経や随意筋（信号やエンジン）および身体全体（船）で機能を立派に果たしている統一体を構成することによって、その遊びはベンの自我がひょろ長い身体や自己を、一時的にせよ支配することを可能にする。またそれは彼が自分自身のボスであるという実在になることを可能にする。同時に、彼はその比喩を機械文明時代初期の世界から選び、その時代の機械の神である大ミズーリ号の船長の同一性を獲得しようとしている。たしかにベンの空想の中の大きな河に浮ぶ強力な船には男根的、移動的要素が十分に含まれている。船長は適切な父親像であり、明確に描写された家長の権力のイメージである。このように考えてみると、遊びはまさに自我の機能であり、身体的、社会的作用と自己とを同調させようとする自我の努力に他ならないといえる。とくに子どもが自己や自分の身体や、社会的役割などについて発達が不十分であり、遅れていると感じている領域を自我が支配しようとする努力をわれわれはそこに読みとることができるのである。なぜなら、遊びにおいて、子どもは自我の支配を幻想し、しかも同時に空想と実際との間にある遊びという中間的現実の中で、それを実践することができるからである。

ところで、エリクソンは『玩具と理性』の中で、「ある神学者がかつて私のことを、他人の楽しみを邪魔する人間、と呼んだことがある。私が厚かましくも子どもの遊びにまで葛藤や目的を見つけ出そうとするからだ。」と述べている。事実、エリクソンに限らず、心理学者や臨床家は子どもの遊びにいろいろな意味づけを試みてきた。たとえば、「外傷」理論によれば、子どもの遊びは、過去の未処理の諸経験を象徴的に再体験することを可能

にし、かつ受動的に苦しめられた経験を能動的支配の経験に転換しようとする強迫的要求の充足に役立つ。「カタルシス」理論は、遊びには、子どもにうっ積した情緒を発散させることを可能にし、或は真面目で有益なことに使い得なかった剰余エネルギーの解放をはかるという効用があるという。「機能」理論は、遊びの中で子どもに新しい能力を行使する機会が与えられ、それによって将来への準備がなされる点を強調する。

これらの理論について、同じく『玩具と理性』の中で、エリクソンは「どの理論も遊びのすべてを説明し尽くすものではないが、かといって私はそのどれをも棄却する気になれない。どれもがあらゆる人間の思想と行動の中に遍在する種々の要因を指摘しているからである。」と述べている。そしてさらに「しかしある遊びの事象の中に何らかの外傷体験の徹底操作を認めることができたとしても、われわれは同時に遊戯性という要因そのものによってその事象が生まれかわるという行為に変質することも認めざるを得ない。また、それらの事象が何かを伝達したい欲求、或は何かを告白したい欲求に支配されているとみえる場合でも、遊戯性の要素はそこに自己表現の喜びを加えているのでもある。成長しつつある能力の行使を明らかに遊びが助けているとしても、それは創意と奔放さを通して助けるのである。遊戯性はいわゆる遊びとして分類される諸事象をもたらすにとどまらない。それは、活動的であること、生き生きとしていることの本質的な構成要素であり」、恐らくいかなる従来の遊びの定義からもすり抜けてしまうだろうと、その遊戯性の重要性を強調している。

そのエリクソンの見解について、具体例をあげても少しくわしくふれてみよう。フロイトが記録した一歳半の男の子の遊びについてのエリクソンの分析がある。その子は、糸巻に結びつけた紐を片手に握って、糸巻をベッドの向う側へ上手に投げる。糸巻はベッドのくぼみの中に消える。すると彼は「オー」(あっちへ行ってしまえ!)という叫びをあげ、そして再び紐を引いて糸巻をベッドから引っぱり出す。出てくるとうれしそうに「ダ」

（あった！）といった。彼はこの遊びを幾度も繰り返した。それは、見えなくなったものがまた再び現われるという一つの完全なゲームであった。その幼児は、さらにある日、母親の留守の間に等身大の姿見に自分の姿が映っているのを発見し、その前でしゃがみこむと、たちまち自分の姿が「消える」のを経験すると、「ベビー・オー」の遊びに夢中になった。そしてそれをその夜帰宅した母親に報告したのであった。フロイトは、何かが消え、そしてまた現われるというこの子どもの一人遊びのテーマの出現頻度が、母親が外出して夜遅く帰宅するという現実の生活経験の厳しさと符合する事実を重要視して、人は本来の形のままでは手に余る事態を、たとえば悪夢として見たら、或は同じ過ちを幾度も繰り返すことによって再体験し、しかも自発的に経験することによって克服しようとするが、この幼児の遊びもその一例であると解釈した。

すなわち、遊びの世界では玩具を思い通りに支配できることを利用して、子どもは自分が支配者となって現実の生活の苦境を遊びの中で再現する。つまり、幼児はゲームの中で母親を糸一本で操るのである。彼は母親を立去らせることも、投げ捨てることもできる。そして自分の意のままに彼女を帰ってこさせるのである。さらに受動的な自分の立場を能動的な立場に置き換えることもできる。現実の世界で彼に対してなされたことを、遊びの世界では逆に彼がして遊ぶのである。このように、自発的な遊びの中で子どもが自力で内面的問題を解決しようとする例証としてフロイトはこの遊びをとらえたが、しかし、エリクソンはその分析を次のようにさらに一層深めている。

エリクソンによれば、この幼児の遊びには子どもの三段階の成長の過程が示唆されているという。第一段階では、彼は糸巻を力いっぱい投げ捨てる。これは「母さんが僕と一緒にいたくないのなら、僕だって母さんなんかいなくても平気だよ」という報復の念の表現であると解釈できる。それはいわば子どもの情緒的自律の成長であり、それによって子どもの環境への積極的支配の姿勢が

増強されることになる。第二段階では、等身大の姿見を使って、彼は自分自身から「立去り」、そして再び自分に帰ってくる遊びをする。今や彼は置去りにされる人間であり、同時に置去りにする人間でもある。彼は現実の世界の彼の手に余る人間ばかりでなく、このような事態全体の、しかもそのパートナー双方も含めての支配者となったのである。ここまでが、フロイトの解釈の及ぶところである。しかしエリクソンは、帰宅した母親を迎えて、幼児が自分の発見した自分自身がいなくなる遊びを告げる場面を第三段階として重要視するのである。

たしかにフロイトがいうように、この糸巻のゲームをして遊ぶだけでも、子どもの側に、苦しい経験を一人遊びの世界に持込んで、空想の世界でそれを調整しようとする傾向が増大する発端となりえたであろう。しかし、ここでエリクソンは、母親がはじめて子どもを置いて外出したときの経験に言及して、そのゲームの効果の限界を指摘しているのである。すなわち、そのような場合、母親は一刻も早く子どもを抱いてやろうと思って大急ぎで帰ってくる。ところが、この子どもが彼の報復心を現実の生活場面にまで持込んで、母親が帰ってきても彼女に全く無関心を装ったと想定してみよう。子どものそっけない顔が待っていただけということになる。母親は拒否されたと感じるかもしれない。この可愛げのないわが子に失望するかもしれない。或はかえって安堵するかもしれない。いずれにしても、恐らく母親は次回からは急いで帰ってくる努力をやめてしまうであろう。その結果、子どもは、物を投げ捨てて、得意になるこのゲームによる報復があまりにうまくゆきすぎて本当に母親を去らせてしまったと感じさせられることになる。事実は、母親から見捨てられた痛手から立直ろうとしてやっただけのことであったのであるが。したがって、それでは、置去りにされる、置去りにするというこの場合の基本的問題は、一人遊びによる解決では少しも改善されることはないのである。

ところが、第三段階で、幼児は自分の遊びのことを母親に告げ、母親はそれに興味を示し、わが子の利発さに

誇らしささえ感じるのである。この結果、彼にとってすべての情況が好転することになる。すなわち、彼は新しい事物を上手に操作することを学習し、彼の用いた手段に対して情愛のこもった承認を得たのである。彼の内部には、新しい能力をもった人間として誰かに確実に愛されたという感覚が芽生えたにちがいない。このように、苦しい経験の反復が「遊戯的支配を通して新生の希望に転換される」のである。彼は困難な事態に見事に適応したのである。エリクソンは、この無意識的に、自発的に起る自我の力をけっして過小評価してはならない、たとえ幼い子どもの自我であってもと力説している。

ここで、もう一つ注目したいことは、この例証からもすでに明らかなように、子どもの遊びに関して、母親の、或は保育者の適切な承認や支援が子どもの自我の成長にとってきわめて重要な役割を果たすということである。これに関連して想起されるのは津守の保育理論である。そこには、子どもの遊びや実験をゆるし、またそれらを見守る保育者の態度が幼児教育において不可欠であるという視点が強調されている。『保育の体験と思索』の中で彼は次のように述べている。

「幼児が自分自身を打ちこんで、ひたむきに遊ぶ姿を生み出すところに、保育のはたらきがある。このような遊びの具体的内容は、多くの場合、あたりまえの、ごたごたした行動にすぎないので、幼児教育という正規のコースを考えるときには、その価値を認められないことが多い。しかし、遊びの中で養われている諸能力には、他のいかなる方法による教育活動におけるよりも、大きなものがある。」そして満ち足りて遊んだ後の幼児を考えてみると、その体験の前と後とでは異質な精神の状態であり、そこには発達の体験があると、遊びの意義を高く位置づけている。ちなみに彼による遊びの観察とその深い洞察の一例を紹介しておこう。

幼稚園の庭で四歳の男児が教師に向って、足もとの小石を拾って投げた。運悪く、後側にガラス戸のあるところに位置していた教師は、「石をぶつけるとガラスが割れるから投げないで」と注意する。少年は掌の上の石を

じっと見ていたが、急に砂場にかけて行き、砂の中に石を埋めた。そして「この中に何があるか」と教師にいう。「石だろう」と答えると、それを掘り出して、「ほら、あった」という。次々にいろいろな物を埋め、教師に答えさせる当てっこのゲームが続いた。最後に、ままごと道具を砂に埋め、さらに砂を盛って、木の枯葉を立て、「火山」といった。そこでこの一連の活動は終り、彼はすっきりした表情で別の遊びに移って行った。

この遊びを津守は次のように分析している。石を砂に埋めたのは、石が子ども自身であったと考えられる。つまり、子どもが関心のある人に石を投げるとき、その石は子ども自身であった。石を砂に埋めて見えなくするのは、叱られて、何か恥ずかしい後めたい気持になった自分自身を、目に見えない内側にかくしたのだと解釈できる。叱られて後めたいような気持ちになると、そういう自分を見えないところにかくすということは、大人にも共通のことである。すなわち、見えない内面の世界を作るのである。人は年齢が進むと、外部に見せる自分と、人には見せない自分の秘密の世界とを区別するようになる。四歳という幼い年齢では、その区別はまだ素朴で、自分自身をかくす場合でも、物を砂に埋めるという具体的な行動の形をとるのである。

このような、砂でおおって人の目からかくした内側の世界は、明るい外側の世界と比べると、人に見られることをはばかる暗さをもった世界である。しかし、この子どもが叱られた場面を注意してみると、この子としては何も悪いことはしていないのである。一緒に遊ぼうという積極的な関心から接近の様式として石を投げたのであって、ガラスが割れるだろうというようなことは全くこの子の念頭にはなかったと思われる。それにもかかわらず、この子は叱られた自分を後めたく思い、かくしたく思ったのである。しかし恐らく彼は釈然としないものを感じていたにちがいない。彼は砂に物を埋めた後、それを何度もとり出し、また埋め、大人の注意を引いて何が入っているか当てさせる遊びを繰り返した。大人は何度もその相手をしてこの遊びをともにし、そして最後に、

彼は石を埋めた砂山に枯木を立てて火山だといって終った。これは、外側の世界と内側の世界とを相互に交流させ、二つの世界を融合させていく試みといってよい。これをつまらない無意味な遊びとして、大人が再び拒否したならば、内部は外部と交流する機会を失い、内部は一層暗さを増すことになったであろう、と津守は指摘しているが、この遊びこそまさに自我の統合機能であり、それはまた、子どもに理解を示す大人たちによって支えられなければならない幼い自我の成長の過程なのである。

さて、このような子どもの遊びは、自分の身体をおもちゃにして遊ぶことから始まり、自分の身体の探索を中心にして展開する、とエリクソンは考え、これを自己宇宙の遊びと呼んでいる。それは大人が遊びであると気づく以前に始まっている。最初は肉体的感覚の知覚、筋肉運動的感覚の知覚、そして発声などを繰り返して模索することから始まる。次に子どもは自分の手の届くところにある人や物をおもちゃにする。どのような音声が母親を呼戻すのにもっとも役立つかをみるために、ふざけて泣いてみる。母親の身体や顔の突起部分や鼻の穴などを指で触れて、探ることに夢中になる。これが子どもが学ぶ最初の地理である。こうして母親との相互作用で得られた基礎的地図が、後に自我が「世の中」に出てはじめて方向を決定するときの道しるべとなるのである。

次に子どもは思いのままに操作のできる玩具の世界で遊ぶ。エリクソンはこれを小宇宙と呼んでいる。それはいわば子どもが築く港である。子どもは自分の自我を分解修理する必要があると、そこに帰って行く。この小宇宙は、しばしば子どもに危険なテーマや態度を不用意に表現するよう誘惑する。すると子どもは不安におそわれ、突然、遊びを分裂させたり、中断させたりする。小宇宙でこのように怯えたり、不安になると、子どもは自己宇宙へ退行する。白昼夢を追い、指しゃぶりをし、自慰にふける。それに反して、玩具の世界で十分に遊び、或は大人に適切に導かれると、玩具という事物を支配する喜びは、それら事物に投射された心の傷痕を支配することと結びつき、またそのような支配から得られる自負

心とも結びつくと考えられている。

そして保育所や幼稚園へ行く年齢になると、遊びは大宇宙に到達するという。それは他の人々と共有する世界である。はじめは人も物として扱われる。子どもは人々を点検し、衝突し、「馬」にする。その過程で、何が空想の世界だけに許され、何が自己宇宙の遊びの中だけに許されるかを発見していかねばならない。また、玩具や事物の小宇宙の世界ではどのようなことを表現できるのか、そして大宇宙の中で、どのような内容を他の人々と共有でき、他人にどのようなことを強制することができるのかなども学ぶ必要があるのである。

このようなことが学習されると、それぞれの世界に独自の現実感や支配感が賦与される。そして、しばらくの間、子どもにとって一人遊びは、社会の荒海の中で激しくもまれて、すっかり痛めつけられた情緒を修理するための避難港として、その役目を果たしつづける。

したがって、子どもの遊びとは、いわゆる大人の気晴らしのためのものではないのである。遊んでいる子どもは、物や人を支配するという新しい段階へ前進する。エリクソンは、子どもの遊びとは、ある事態の雛型を創造することによって経験を処理し、また実験し計画することによって現実を支配するという人間の能力の幼児的表現形式であると主張する。大人が過去の経験を投射するのは、彼の仕事のある一面においてのことである。実験室の中で、演劇の舞台の上で、彼は自分の過去を再体験する。こうして燃え残ってくすぶりつづける情熱を発散させるのである。ある事態の雛型を再構成して、自分の失敗を取繕い、自分の希望を強化する。彼は修正し、人々と共有した過去についての見解をもとにして未来を予測するのである。エリクソンは、いかに考える人でもこれ以上のことはできないし、遊びにふける子どもでもこれ以下のことはしないという。そして、ウイリアム・ブレイクの「子どもの玩具と老人の理性は二つの季節の果実である」というきわめて味わい深い言葉で、『幼児期と社会』の中の「遊び、仕事、成長」の章を結んでいる。

（津田塾大学）

山下俊郎先生を悼む

山下俊郎先生が、去る三月十九日に逝去された。謹しんで哀悼の意を表したい。

先生は、昭和三十年から、二十七年間にわたり、日本保育学会の会長をつとめられた。先生は、戦前から戦後にかけて現在にいたるまで、常にかわらずに、所信をもって、幼児の保育のためにつくされた。日本の保育界における先生の功績は大きい。

本誌との関係について云えば、第三十五巻十一号（昭和十年）に、「幼児に於ける習慣の問題」と題する文章を書かれて以来、ことに昭和二十一年復刊後は、編集協力委員として、また、その後長く巻頭論文を毎年きまって書かれてきた。本誌に寄せられた文章だけでも、数えあげることが困難なほどである。先生が本誌に執筆された最後の論説は、八十巻四号（昭和五十六年）に寄せられた「幼稚園の学級定員再論」である。幼稚園の一クラスの人数が四十名であることが日本の保育の向上を阻んでいるというのは、先生の持論のひとつであったし、こういうことになると、日頃は端正な英国風紳士の奥に秘められていた反骨精神を、あからさまに発揮された。八十巻九号に掲載された立川多恵子氏による先生との記念インタビューの最後には、「保育」という語に対する愛着について語られている。「いたわりの心、子どもを可愛がる心、そういう心で接していかなくてはいけないんだと。（保育要領が）教育要領に変わった時も、教育であると真正面から切り込むのは、幼児を育てる心じゃない」と云われる、そういうときの先生の毅然とした精神にふれて背筋を正される思いをしたことがあるのは私だけではないと思う。先生が日本の保育界に生きられたことの意義を思い、先生のご苦労に感謝したい。

（津守　真）

幼児の教育　第八十一巻　第六号

六月号　©　定価二七〇円

昭和五十七年五月二十五日　印刷
昭和五十七年六月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。

●フレーベル先生の生誕200年記念・遺跡を訪ね…北欧の自然とメルヘンのふるさとにふれる●

昭和57年度 ヨーロッパ幼児教育視察旅行 15日間

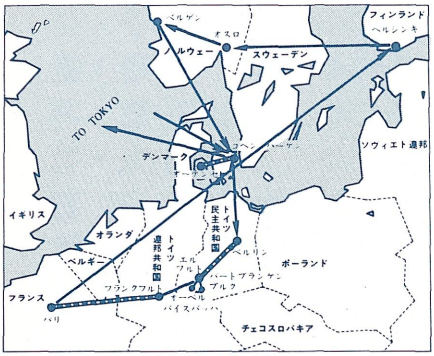
8月8日～8月22日

ヨーロッパの自然とメルヘンのふるさとへ

ことしはフレーベル先生の生誕200年記念の年です。よそおいも新たになった遺跡をゆったりとした日程で巡ります。さらに今回はじめてフィンランド、ノルウェー、デンマークと北欧の幼児教育施設を中心に視察し、アンデルセンのふるさとオーデンセを最終訪問地として計画いたしました。幼児教育の祖とメルヘンと白夜がいざなう旅へご案内いたします。みなさまのご参加をお待ち申し上げます。

⬆ 森林公園内にあるフレーベル記念碑
（バートブランケンブルク）

⬅ フィンランドの"公園おばさん"と幼児たち
（ヘルシンキ郊外）



経路略図

経　路

東京→コペンハーゲン→東ベルリン→エルフルト→バートブランケンブルク→エルフルト→オーベルバイスバッハ→パリ→ヘルシンキ→ベルゲン→コペンハーゲン→東京

期　間

昭和57年8月8日(日)～8月22日(日)

費　用

779,000円（ローンも可能です）

申込〆切

昭和57年6月19日(土)

人　員

25名以上(定員になり次第〆切らせていただきます)

主　催

フレーベル館現代幼児教育研究会
日本交通公社国内海外団体旅行新宿支店

★お問い合わせは
フレーベル館 現幼研ヨーロッパ視察旅行係
東京都千代田区神田小川町3－1
〒101　☎ 03（292）7781
くわしい資料をお届けいたします。

株式会社 フレーベル館

新刊案内

幼稚園教育早わかり　一問一答

文部省幼稚園教育課内　幼稚園教育研究会　編著

幼稚園教育の内容から法令にいたるまでの総合的なガイドブック誕生!!

本書は、豊かな幼稚園教育のために、その内容から法令、通達にいたるまでの諸問題を、文部省幼稚園教育課のメンバーが総力を挙げて懇切丁寧に説きあかした画期的なガイドブックです。幼稚園教育の向上をめざす人びとにとって、本書はまさに必携の１冊といえましょう。

Ａ５判・276頁・定価1,200円

幼児をのばす　指導のポイントシリーズ（全10巻）

微妙で大切な保育のカンどころを、がっちりと読みとろう！

子どもたちに豊かな保育をと心をくだいておられる先生や、子どもがよくわからない、きっかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

①保育の視点－ここがポイント　海　卓子・著
②指導計画－ここがポイント　高杉自子・著
③絵画の指導－ここがポイント　林　健造・著
④音楽の指導－ここがポイント　早川史郎・著
⑤体育の指導－ここがポイント　三宅邦夫・著
⑥自然の指導－ここがポイント　小山孝子・著
⑦ことばの指導－ここがポイント　阿部明子・著
⑧ごっこ遊び－ここがポイント　笠間典美・著
⑨園行事－ここがポイント　仲田あつ子・著
⑩母親対応－ここがポイント　本吉圓子・著

Ｂ６判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館